

『重陽真人金關玉鎖訣』について

蜂屋邦夫

目次

はじめに

一 原理的問題

二 形式的問題

(1) 修行段階

(2) 修行形態

(3) 附隨事項

(4) 修行の種類と神仙の種類

三 内容的問題

(1) 具體相

① 五臟、五行、八卦

『重陽真人金關玉鎖訣』について

② 水火論

③ 三寶搬運論

④ 行功論

(2) 效用面

① 精血論

② 清靜論

③ 有難論

④ 治病その他

四 象徴

五 效果

(1) 條件

(2) 結果

おわりに

は じ め に

一二世紀の中ばに、金朝治下の華北地方におこった全真教は、舊道教の様ざまな迷妄を打破した改革派であり、^(一)動亂の世に生きる人びとの要求に答えた実践的・改新的・共感的な道教であった、^(二)といわれる。しかし、宗教として最も肝要である筈の教理について、「王重陽や七真人たちをはじめとする全真道士たちののこした詩集や語録、あるい

は傳記その他にあらわれている言動などを綜合して考えても、くわしい點を明らかにするのが困難である^(三)というのが實狀である、とすれば、改革派とか實踐的云々の性格規定も甚だ曖昧である、といわねばならない。即ち、全眞教研究の意味を問えば、まずは、中國宗教史・思想史上に、より根本的には、中國の歴史全體の中に、どう位置づけ、評價するかということであると思われるが、未だその具體的根據が甚だ薄弱なのである。然らば、何故に教理内容を明かにしないでいるか、といえは、一にかかつて特殊用語の難解さと、詩詞などの表現形式の面妖さにある、といつてよい。それ故、本稿は、標題した資料につき、その整理・解釋を行つて、些かでも教理の具體相を明かにしたい。

《重陽真人金關玉鎖訣》とは、全眞教の開祖王重陽（一一二一—一二七〇）による、「金關玉鎖」の教えに關する口訣という意味であり、上海涵芬樓影印『道藏』第七九六冊（交字下）に收録されている。「金關玉鎖」が具體的に何であるかについては、本稿三①④行功論に説明される。だが、撰者については、若干の疑問點がある。第一は、「我師言曰……」〔八表〕、「告我師願求……」〔一四表〕のように、師について明言すること、第二は、「解曰聞《傳道集》中……」〔二三表〕、「呂翁曰『不因師指……』」〔一四裏〕のように、鍾離權・呂純陽について言及・引用すること、第三は、所引《傳道集》中の五等の神仙の數え方が、《五篇靈文》^(六)の王重陽注の數え方と異なること、などである。資料の流傳の實態は全く不明であり、或いは末流一派が、王重陽に假託したものかもしれず、確定的なことは現在何もいえない。一應の疑いを存しておく。

一方、これを表記通り王重陽撰とする根據もなくはない。即ち、これは、所謂内丹に關する教説であるが、王重陽は、鍾呂からその教えを承けている、と思われるふしがあるのである。内丹とは、大まかにいえば、文字通りの金丹道（鍊金術）を外丹というのに對して、《傳道集》^(八)《論丹藥第九》に「内丹之藥材、出於心腎、是人皆有也。内丹之藥

材、本在天地、常日得見也」とあるように、金丹道の用語を養生法的に解釋し、服氣胎息法などもとり入れ、天人相關説を根據とした、なかば醫學的な教説である。王重陽の詩詞の隨所に内丹の用語が見えており、《金關玉鎖訣》を王重陽撰としても教理上の無理はない、といえるほかに、資料的には、《金蓮正宗記》^(九)《重陽王真人》條下に「遂索毫楮、書祕語五篇、使之詳讀」、「昔日甘河所得祕語五篇」などの表現があつて、この祕語五篇は實は《五篇靈文》ではないかと思われることや（これは、例えば前述の如く五等の神仙の數え方で《金關玉鎖訣》と異なり、その他若干の齟齬はあるけれども、兩者とも内丹の教義に關するものである）、更に、王重陽撰の《分梨十化集》などにも、甘河で呂純陽に遇會したとあり、《呂祖年譜》第四卷《度重陽》條下〔呂祖全書、上、二二三頁〕にも「純陽即授以口訣……更授以金丹直指」とあるなど、鍾呂——内丹——重陽の線は、かなり直線的に迎れるのである。かかる問題は、全真教理の生成と發展の全體的展望が開かれるとともに明瞭になつてこようが、本稿は、資料の教理史的な位置づけをめざすものではなく、まずは、教理内容自體の解明を志向するものである。

しかしながら、研究法は暗中摸索の域をでず、沉んや研究書は皆無である。參見すべき資料は茫漠としており、流傳繼承の有無前後は錯綜を極める。更に、資料自體の錯誤不全是、他の版本がないため殆ど修復不可能に近く、語句の意味にも不明な點が多い。それ故、本稿は、あらゆる意味で甚だ不完全であり、暫定的な整理にすぎない。

整理・解釋の方法としては、現行の資料の體裁を無視して、內的關連によつて前後を並べ直し、まず資料内部で語句解釋の完結を求め、次に王重陽及びその直弟子達の文章を參照し、更に《傳道集》など鍾呂の言説に聽き、最後にその他の内丹關係の書物によつた。各種資料は、上海・涵芬樓影印・道藏〔藏〕、道藏輯要及び重刊道藏輯要〔要〕、上海・醫學書局・道藏精華錄百種〔精〕、臺灣・自由出版社・道藏精華〔自〕などによつた。〔〕内は本稿での畧號

である。

一 原理的問題

《金關玉鎖訣》の教理の最も根本的な根據は、天人の相關である。それは、天に各種の現象があるように、人にも、それに應じて自然に各種の現象がある、ということ、即ち、天の秩序運行に應じて人身の諸現象を類推するだけであつて、相關の根據が問われるわけではない。何かを根據として現象を整理・理解するという態度は、一種の合理主義ともいえるが、根據の原理が問われない時、それは單に經驗的知識にとどまるか、附會甚だしい迷信であるにすぎない。内丹の理論とは、そんなものである。

① 夫人之一身、皆具天地之理。天地所以含養萬物。萬物所以盈天地間。其天地之高明廣大、未嘗爲萬物所蔽。修行之人、凡應萬事、亦當體之。⁽¹⁾ 難曰「天有昏暗、地有動搖、山有崩摧、海有枯竭、日月有盈缺、且人有疾病無常。如何治之。」答曰「欲要治之、除是達太上煉五行之法。」⁽²⁾〔一表裏〕

ソレ人ノ一身ハ、皆天地ノ理ヲ具ス。天地ハ萬物ヲ含養スル所以、萬物ハ天地ノ間ヲ盈タス所以ナリ。ソレ天地ノ高明ニシテ廣大ナル、未ダ嘗ツテ萬物ノ蔽ウ所トナラズ。修行ノ人、凡ソ萬事ニ應ジテ、マタ當ニコレヲ體スベシ。⁽¹⁾ 難シテ曰ク「天ニ昏暗アリ、地ニ動搖アリ、山ニ崩摧アリ、海ニ枯竭アリ、日月ニ盈缺アリ、且ツ人ニ疾病無常アリ。如何ゾコレヲ治スルヤ。」答エテ曰ク「コレヲ治セント欲要^{ホツ}ツスレバ、除是^{トリツケ}太上五行ヲ煉ルノ法ニ達セヨ。」⁽²⁾

(1) 天人相關の説は、他の箇處にも見える。例えば、

『重陽真人金關玉鎖訣』について

夫眞道者、空中有實、實中有空。經〔太上老君說常清靜經〕云「大道無形、生育天地」、「大道無名、長養萬物。」從眞性所生。爲人者、亦復如是。〔三裏〕

冬至日、一陽生。夏至日、一陰生。冬至者、是子時已後、望東方日出爲陽。夏至者、午時已後、日沒是陰也。陰陽返復之理也。地氣上騰、天雨下降。三日一風、十朝二雨。風雨順時、人民便快樂。便是一身快樂、無病長久也。〔二裏—三裏〕

その他〔陰符經〕卷上・唐淳注に「見天道運行、又觀人道不別於天道也」とあるなど。

(2) 二(1)参照。

⑥ 問曰「如何是五行之法。」訣曰「第一先須持戒、清靜忍辱、慈悲實善、斷除十惡⁽¹⁾、行方便救度一切衆生、忠君王、孝敬父母師資⁽²⁾。此是修行之法。然後習眞功。」〔二裏〕

問イテ曰ク「如何ゾ五行ノ法。」訣シテ曰ク「第一ニ先ヅ戒ヲ持シ、清靜ニシテ辱ヲ忍ビ、慈悲ニシテ善ヲ實トシ、十惡ヲ斷除シ⁽¹⁾、方便ヲ行イテ一切ノ衆生ヲ救度シ、君王ニ忠ニシテ父母師資ヲ孝敬スベシ⁽²⁾。コレ修行ノ法ナリ。然ル後、眞功ヲ習エ。」

(1) 佛教では身口意の三業に關する十種の惡をいうが、道教はそれを取り、ここも同様であろう。〔說戒〕へ太霄琅書十善十惡〔六表。精・一集所收〕に、

無數諸戒、無央科律、皆輔一神、攝於三業。三業者、口身心也。運動造作、善惡無量。無量善惡、十爲惡端。

一者妄言、二者綺語、三者兩舌、四者罵詈。此四口惡、返之則善。

五者貪愛、六者竊盜、七者姦淫。此三者屬身。

八者嫉妬、九者恚瞋、十者邪癡。此三者屬心。心業最重、爲十惡根。

とある。その他、同じく《說戒》に《說十戒》があるが、第一戒が「不得違戾父母師長、反逆不孝」とあるなど若干不適當である。なお、丘長春の《大丹直指》卷下に十魔君の説明があるが、十惡との關係は未定である。(2) 二(4)⑥に「孝養師長父母、六度萬行方便、救一切衆生、斷除十惡」とあり、ことと相似る。師導の必要については、二(3)③参照。

◎ 或問曰「如何是修真妙理。」答曰「第一先除無名煩惱⁽¹⁾。第二休貪戀酒色財氣⁽²⁾。此者便是修行之法。」(一表)或ヒト問イテ曰ク「如何ゾ修真ノ妙理。」答エテ曰ク「第一、先ヅ無名ノ煩惱ヲ除ク。第二、貪戀酒色財氣ヲヤム。コレ便チ修行ノ法ナリ。」

(1) 三(2)①④⑥にも「無名煩惱」とあるが、名は明に作るべきものである。

(2) 三(2)①⑥に「欲樂貪戀境界」とある。従つて、酒色財氣ニ貪戀スルと讀むべきでない。

酒色財氣については、《重陽教化集》卷二、三表(藏七九五冊)に《化丹陽》として

凡人修道、先須依此一二二箇字斷

酒、色、財、氣、攀緣愛念憂愁思慮

とあるなど、隨所に散見するが、特に《重陽全真集》卷一、一八表裏(藏七九三冊)の《一字至七字詩》に、酒色財氣それぞれを詠んだ詩がある。

『重陽真人金關玉鎖訣』について

本章は、教理の根據と修行の前提條件を問題としている。天人相關の理論は、明かに五行思想に淵源しており、この内丹流の五行思想は△金關玉鎖訣▽全體を貫徹する。しかし、その實踐は、直ちに教理の核心を把握して實行する頓悟的・出世間的なものではなく、現實的世俗的ことから修行の前提とする點、段階的・漸悟的であり、體制に順應したものである。

二 形式的問題

本章は、細かく具體的に修行の外面を論じたものを集める。修行段階として三乗の論が示されるが、そこにおいて前章で問題とされた修行の前提は、實は小乗下乗の段階であることがわかる。三乗の論は三教の論と重なり、儒佛道が同一次元のものとされる。これは全眞教の一つの特色である。ついで導師の必要性や修行の禁忌、修行方法の種類と修行成就者の段階を論じたものを集め、全體で修行の形式的側面を論述した概論と解しておく。

(1) 修行段階

① 昔日、老君煉金木水火土、留下三乘妙言⁽¹⁾。行行滅罪、句句長生。第一上有神仙抱一。第二中有富國安民。第三下有強兵戰勝。

問曰「何者是神仙抱一。」抱一者、天下人身之根本。一者、是萬物之根本。一者、爲道也⁽²⁾。昔爲初一者、眞水也⁽³⁾。

水中生氣。氣中生水。萬物者、從一生。萬物是長養。「一生二、二生三、三生萬物。」三中、四智功、五眼。恁起六根、掃蕩七魄、運開八卦、說九思。眞道憑無漏果圓融。意想、自神長在丹田、抱守元炁、莫教散失。此者、是抱一之法。

問曰「何者是富國安民。」訣曰「男子女人、身中各有九江四海。龍宮庫藏、中有七珍八寶。莫教六賊偷了。此是、富國安民。」

問曰「何者是強兵戰勝。」訣曰「夫戰勝者、天下少人知。夫戰勝、是常之法。」難曰「既論清靜之法。何得說戰勝理。」解曰「今人不達戰勝之法。又能治於病疾無常。戰勝者、第一、先戰退無名煩惱。第二、夜間境中、要戰退三尸陰鬼。第三、戰退萬法。此者、是戰勝之法。」〔三裏一四裏〕

昔日、老君ハ金木水火土ヲ煉リ、三乗ノ妙言ヲ留下ス。行行ニ罪ヲ滅シ、句句ニ生ヲ長ズ。第一上ニ、神仙抱一アリ。第二中ニ、富國安民アリ。第三下ニ、強兵戰勝アリ。

問イテ曰ク「何者ゾ、神仙抱一トハ。」抱一トハ、天下人身ノ根本。一トハ萬物ノ根本。一トハ道タルナリ。昔、初一タルハ、眞水ナリ。水中ニ氣ヲ生ズ。氣中ニ水ヲ生ズ。萬物ハ、一ヨリ生ズ。萬物ハ長養ナリ。「一、二ヲ生ジ、二、三ヲ生ジ、三、萬物ヲ生ズ。」三中、四智功、五眼。六根ヲ恁起シ、七魄ヲ掃蕩シ、八卦ヲ運開シ、九思ヲ説ク。眞道ハ無漏ノ果ニ憑リ圓融ス。意想セヨ、自ヅカラ神長ジテ丹田ニアリ、元炁ヲ抱守シ、散失セシムルコトナカレ。コレ、抱一ノ法ナリ。

問イテ曰ク「何者ゾ、富國安民トハ。」訣シテ曰ク「男子女人、身中ニ各九江四海アリ。龍宮ノ庫藏ノ中ニ七珍八寶アリ。六賊ヲシテ偷了セシムルコトナカレ。コレ、富國安民ナリ。」

問イテ曰ク「何者ゾ、強兵戰勝トハ。」訣シテ曰ク「ソレ戰勝トハ、天下ノ少人知レリ。ソレ戰勝トハ、常ノ法ナ

リ」⁽²⁰⁾難ジテ曰ク「既ニ清靜ノ法ヲ論ジタリ。⁽²¹⁾何ゾ戰勝ノ理ヲ説クヲ得ンヤ。」解シテ曰ク「今人、戰勝ノ法ニ達セズ。マタ能ク病疾無常ヲ治ス。⁽²²⁾戰勝トハ、第一、マズ無名煩惱ヲ戰退ス。⁽²³⁾第二、夜間ノ境中、三尸ノ陰鬼ヲ戰退スルヲ要ス。⁽²⁴⁾第三、萬法ヲ戰退ス。コレ、戰勝ノ法ナリ。」

(1) 前章^①太上煉五行之法である。

(2) 唐淳注^②《黃帝陰符經》は、神仙抱一演道章(上)、富國安民演法章中、強兵戰勝演術章下に章別される。

(3) 《陰符經》唐淳注に「一者、道也」(卷上二表)とある。

(4) 《陰符經》唐淳注に「眞一之道、名曰太一。太一者、水之宗號」(卷上三表)とある。また、丘長春^③《大丹直指》(卷上八表)に、「華陽施真人曰、腎、水也。水中生氣、號曰眞火。火中暗藏眞一之水、而曰陰虎。心、火也。火中生液、號曰眞水。水上暗附正陽之氣、而曰陽龍。」とあるが、宇宙生成論が直接に人體のメカニズムに移行されているのが注目される。

(5) 衍文と思われる。《太上老君說常清靜經》「大道無名、長養萬物」の意味をとったものか。

(6) 《道德經》道化第四章。

(7) 《仙學辭典》(戴源長編、李樂依校。臺灣臺北監獄印刷工場、一九六二・一〇)三中條下に「一曰、心中之意。二曰、臍中之鼎。三曰、腎中之爐。煉丹始終不離此三中、蓋人身受自天地中氣而生、方有其命」とある。

(8) 佛教の四智をとったものか。隋・慧遠撰《大乘義章》卷一九(四智義三門分別)「正四四、八四六下」に「言四智者、我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受後有。是其四也」とある。

(9) 佛教の五眼をとったものか。《隨求經》卷上《具足五眼》「正二〇、六一七上」に「一肉眼、肉身所有之眼。

二天眼、色界天人所有之眼。人中修禪定可得之、不問遠近内外晝夜、皆能得見。三慧眼、謂二乘之人、照見眞空無相之理之智慧。四法眼、謂菩薩爲度衆生、照見一切法門之智慧。五佛眼、佛陀身中具備前四眼者」とある。その他《大乘義章》卷二〇「八五一下—八五二上」にも同様の説明がある。

(10) 恁起の意味は未詳。或いは上につくものか。六根は《眞仙直指語錄》〔藏九九八冊〕卷下一六表に「清和尹眞人語」「六根者、眼不妄視、耳不妄聽、鼻不妄聞香臭、舌不妄嗜滋味、身不妄貪細滑、意不妄遊思慮」とある。但し、これは單なる六根の説明ではなく、六根清靜の説明であらう。無論、これは佛教からとつたものであり、例えば、《大乘義章》卷四「十因義」〔正四四、五四二中〕に「……以有六根、生於六識」とある。

(11) 《雲笈七籤》卷五四魂神部(一)《制七魄法》に、次のように説明される。

樂人之死、皆魄之性。欲人之敗、皆魄之病。道士當制而厲之、陳而變之、攝而威之。

其第一魄名尸狗

其第二魄名伏矢

其第三魄名雀陰

其第四魄名吞賊

其第五魄名非毒

其第六魄名除穢

其第七魄名臭肺

此皆七魄之名也。身中之濁鬼也。

『重陽眞人金關玉鎖訣』について

また、《太上除三尸九虫保生經》〔藏五八〇冊〕参照。

(12) 元・蕭元瑞撰《金丹大成集》〔精八〕《金丹問答》に次のようにある。

問内外八卦。

答曰、頭爲乾、腹爲坤、膀胱爲艮、膽爲巽、腎爲坎、心爲離、肝爲震、肺爲兌也。

また、三(1)①a参照。

(13) 《論語》季氏篇に「孔子曰、君子有九思」とあって、視思・聽思などの説明があるが、それを指すかどうか未詳である。佛教に九識の説があるが、それに相當するかもしれない。

なお、王重陽の文章中に、數を順に並べていく説明がいくつかあり、以上のものと重なるものに例えば、

《重陽教化集》卷一・七裏《心月照雲溪》一身之内、二物成眞寶。著意辯三才、列四象、五行化造。六賊

門外、七魄莫狂遊、八卦定、九宮通、功行十分到……

などがある。

(14) 宋・張伯端撰《悟眞外篇》〔精七〕《金丹四百字序》に、

以魂在肝而不從眼漏

魄在肺而不從鼻漏

神在心而不從口漏

精在腎而不從耳漏

意在脾而不從四肢孔竅漏

故曰無漏。

とある。なお、三②③④参照。

(15) 《鍾呂傳道集》〔精六〕《論煉形第一四》に、次のようにある。

欲民安者、在國富。……所謂國者、本身也。其身之有象者、豐足而常有餘。其身之無形者、堅固而無不足。

(16) 《鍾呂傳道集》《論水火第七》に、

凡身中以水言者、四海五湖、九江三島。……心爲血海、腎爲氣海、腦爲髓海、脾胃乃水穀之海。所謂四海者、如此。……小腸二丈四尺、而上下九曲、乃曰九江。

とある。なお、四、及び三①②③参照。

また、《養生內功秘訣》第三部道語辭解〔自・養生長壽秘訣集成、續集之一〕に

龍宮、龍爲精、龍宮就是炁穴。

とある。

(17) 三②③参照。似た表現に、《重陽全真集》卷二・一二裏に「鍊取純陽身七寶」などがある。

(18) 佛教の六賊をとったものであろう。六賊は次の如し。

北涼・曇無讖譯《大般涅槃經》卷二三〔正一一、五〇一七〕、六大賊者、卽外六塵。菩薩摩訶薩觀此六塵如六大賊。……

唐・般刺蜜諦譯《大佛頂如來萬行首楞嚴經》卷四〔正一九、一二二下〕、則汝現前眼耳鼻舌、及與身心、六爲賊媒、自劫家寶。……

『重陽真人金關玉鎖訣』について

(19) 《鍾呂傳道集》《論煉形卷一四》に次のようにある。

欲戰勝者、在兵強。……所謂兵者、元氣也。其兵在內、消形質之陰。其兵在外、奪天地之氣。

(20) 是の上、不字を脱するか。

(21) 資料本文は、清靜の法を先に説明してある。

(22) 能の上、不字を脱するか。

(23) 名は明の意味。一c(1) 参照。

(24) 似た表現は三(2)①a②bにもあり。三戸陰鬼とは、宋・張紫陽撰《悟真篇》の、清・董德寧注《正義》〔精七〕卷中に、「三戸者、上中下之戸神。乃氣質之陰性所化」とあるほか、《太清中黃真經》九仙君撰、中黃真人注〔精八〕食氣玄微章第二に、次のようにある。

一者、上蟲居腦宮。(注)洞神玄訣……其色白而青、名彭居。使人好嗜欲癡滯。

二者、中蟲住明堂。(注)洞神玄訣曰、中蟲、名彭質。其色白而黃。居中丹田、使人貪財、好喜怒、濁亂眞氣、使三魂不居、七魄流閉。……

三者、下戸居腹胃。(注)下戸、其色白而黑。居下丹田、名彭矯。使人愛衣服、耽酒好色。

また、これらについての詳細は、

窪德忠《庚申信仰》、東京大學東洋文化研究所發行、一九五六・一一。《三戸説とその信仰》

窪德忠《庚申信仰の研究——日中宗教文化交渉史——》、日本學術振興會、一九六一・三。第一章、第六章参照。

⑥ 夫修行、若内外相應⁽¹⁾、未言大乘。先說小乘。……訣曰、見在一身安樂爲小乘。都是大乘之根。初地法心爲小乘。結果爲大乘。小乘爲根、大乘爲梢。訣曰、梢根相借。梢借根而生。〔三表裏〕

ソレ修行ハ、内外相應ズル若キハ⁽¹⁾、未ダ大乘ヲ言ワズ。マズ小乗ヲ說ク。……訣シテ曰ク、見在ノ一身ノ安樂ヲ小乗トナス。スベテ大乘ノ根ナリ。初地ノ法心ヲ小乗トナス。結果ヲ大乘トナス。小乗ヲ根トナス、大乘ヲ梢トナス。訣シテ曰ク、梢根相借ル。梢、根ヲ借リテ生ズ。

(1) 若、或いは者の誤りか。このままでは文意通ぜず、ソレ修行トハ内外相應ズ、未ダ大乘ヲ言ワズ、マズ小乗ヲ說ク……ならば他の文意と矛盾しない。

⑦ 若人會得三乘者、變殃惱爲福也。夫修行者、常清靜爲根本大乘之法。欲爲大乘者、須索從小乘而起。〔四裏一五表〕

モシ人三乗ヲ會得セバ、殃惱ヲ變ジテ福トナスナリ。ソレ修行ハ、常ノ清靜ヲ根本大乘ノ法トナス。大乘ヲナサント欲スル者ハ、スベカラク小乗ヨリ起ルヲ索ムベシ。

⑧ 或有未出家之人、年少時不能持清靜之果、從小乘入中乘上⁽¹⁾乘。初地達法心、爲小乘。覺悟者、爲中乘。了達者、爲上乘。第一是化城。第二是銀城。第三是金城。似一根大樹、先有其根、後有其梢。如常時只宜清靜、大爲正道也。

〔五表裏〕

或イハ、未ダ出家セザルノ人ニシテ、年少時、清靜ノ果ヲ持スル能ハザラバ、小乗ヨリ中乘上⁽¹⁾乘ニ入レ。初地、

法心ニ達スルヲ小乗トナス。覺悟セル者ヲ中乗トナス。了達セル者ヲ上乘トナス。第一ハ化城ナリ。第二ハ銀城ナリ。第三ハ金城ナリ。一根ノ大樹、マズソノ根アリ、後ニソノ梢アルニ似タリ。常時、タダ宜シク清靜ナル如キハ、大イニ正道タルナリ。

(1) また「當日初發善心處、便是吉祥之地、爲善法」〔二三表〕の如き表現あり。

⑤ 問曰、「何者は三乗之法。」訣曰「下乗者、如新生孩兒。中乗者、如小兒坐地。上乘者、如小兒行走。若人通此三乗、便超三界。欲界、色界、無色界、是。心性意、顯具三身。清靜法身、圓滿報身、三昧化身。三者、各有顯跡之神。」〔一二表裏〕

問イテ曰ク「何者ゾ、三乗ノ法トハ。」訣シテ曰ク「下乗ハ、新生ノ孩兒ノ如シ。中乗ハ、小兒地ニ坐ルガ如シ。上乘ハ、小兒ノ行走スルガ如シ。モシ人コノ三乗ニ通ゼバ、スナワチ三界ヲ超ユ。欲界、色界、無色界、コレナリ。心性意、三身ヲ顯具ス。清靜法身、圓滿報身、三昧化身、三者オノオノ顯跡ノ神アリ。」

(1) この三乗は、佛教の聲聞・緣覺・菩薩の三乗に相當するものであらう。

(2) 丘長春《大丹直指》卷下八裏に「黃帝、以火龍出靜中。化火龍上躡。自然身外有身、號曰清靜法身」とある。この顯跡の三身は、佛教の清靜法身・圓滿報身・三昧應身に相當するものであるう。

⑥ 此修真成訣者、價直須彌金取諸經、爲祖對。⁽¹⁾ 安樂者、是小乗之法。雖是小乗、却是大乘根本。〔二三裏—二三表〕コノ眞ヲ修シ訣ヲ成ス者、直チニ須彌金ニ諸經ヲ取リテ祖對ヲナスニ價ス。⁽¹⁾ 安樂ハ、小乗ノ法ナリ。小乗ナリト雖

モ、却ッテ大乘ノ根本ナリ。

(1) ここまで文意不明であり、本稿の讀みは便宜的である。金は山の誤りか。爲祖對は或いは下に續くものか。祖は、道教的には性命の性のいみがあるが、祖先の祖であるかもしれない。

(2) 修行形態

① 第一會。太上。煉甲乙、木。是虛坦會。老君著青衣、度三千青衣道士者、轉青神黃卷三十六部靈寶尊經。留下九轉丹、黃芽穿膝之法。

絕國第二會。釋迦佛留下。煉南方、丙丁、火。身被烈火袈裟。三千赤子比丘僧人。留下十二部大乘尊經。射九重鐵鼓之法、蘆芽穿膝之法。

龍華三會。夫子在魯國之習學堂。煉西方、庚辛、金。三千白衣居士。留下十卷論語。并穿九曲明珠、蘆芽穿膝之法。
〔一二裏〕

この箇處、錯誤が甚だしい。前後比較し、意を以て改め、而後讀み下す。

虛坦第一會。太上老君。煉東方甲乙木。著青衣。度三千青衣道士。留下、轉青神黃卷三十六部靈寶尊經。九轉丹、
黃芽穿膝之法。⁽²⁾

絕國第二會。釋迦佛。煉南方丙丁火。身被烈火袈裟。度三千赤衣比丘僧人。留下、十二部大乘尊經。射九重鐵鼓之法、
蘆芽穿膝之法。⁽³⁾

龍華第三會⁽⁴⁾。夫子。煉西方庚辛金。在魯國之習學堂。度三千白衣居士。留下、十卷論語。并穿九曲明珠⁽⁵⁾、蘆芽穿膝之法。

虛坦第一會。太上老君、東方甲乙木ヲ煉ル。青衣ヲ著シ、三千ノ青衣ノ道士ヲ度ス。轉青神黃卷、三十六部ノ靈寶尊經、九轉丹⁽¹⁾、黃芽穿膝ノ法ヲ留下ス。

絕國第二會。釋迦佛、南方丙丁火ヲ煉ル。身ニ烈火ノ袈裟ヲ被リ、三千ノ赤衣ノ比丘僧人ヲ度ス。十二部ノ大乘尊經、射九重鐵鼓ノ法⁽³⁾、蘆芽穿膝ノ法ヲ留下ス。

龍華第三會。夫子、西方庚辛金ヲ煉ル。魯國ノ習學堂ニアリテ、三千ノ白衣ノ居士ヲ度ス。十卷ノ論語、ナラビニ穿九曲ノ明珠⁽⁵⁾、蘆芽穿膝ノ法ヲ留下ス。

(1) 《眞仙直指語錄》卷上八裏に、馬丹陽の言葉として、

欲要養氣全神、須當屏盡萬緣、表裏清靜。綿綿固守、用之不勤。三年不漏、下丹結。六年不漏、中丹結。九年不漏、大丹結。圓備是九轉丹成、亦名三千功滿。

とあり、また《丹陽語錄》にも、より詳細な類似の表現がある。一方、《傳道集》《論還丹第三》に、

呂曰……九轉者、以其肺之陽、本自心生、轉而復於心、亦在中丹……

などの表現がみえる。五行ヲ煉ルノ法という表現があつたことを想定すれば、この九轉丹は、馬丹陽の言うような抽象的なものではなく、《傳道集》中の意味であらう。

(2) この法の意味は未詳であるが、黃芽については、《悟眞篇正義》卷上に、

黃芽白雪不難尋。(注)黃芽白雪者、即鉛汞之二物也。《復命篇》〔宋・薛式道光撰〕曰「……黃芽便是氣

樞花」、《翠虛篇》〔宋・陳楠撰〕曰「黃芽本是乾坤氣……」皆此之義也。

とある。

(3) 《仙學辭典》、九重鐵鼓の條下に、

藥物運轉周天、要經過三關九竅、如黃河之九曲三灣、其水逆流、其關竅彎曲、不易突過、如鐵鼓之難穿也。
とある。

(4) 《重陽教化集》卷三・一裏に「……隨我上青霄、同赴龍華會」〔遇仙槎〕、《重陽全真集》卷一・一裏に「…

…山頭並赴龍華會、我赴蓬萊先禮師」〔結物外親〕とあるなど、全真教でもこの用語を使用する。

(5) 三(2)④に「急用穿九曲之法。又名九轉穿小腸……」とあるので、九曲とは小腸のことであろう。

⑥ 三教者、如鼎三足、身同歸一、無二無三。三教者、不離眞道也。喩曰、似一根樹生三枝也。〔一二裏——三表〕
三教ハ、鼎ノ三足ノ如ク、身ハ同ジク一ニ歸シ、二ナク三ナシ。三教ハ、眞道ヲ離レザルナリ。喩エテ曰ク、一根
ノ樹ニ三枝ヲ生ズルニ似タリ。

⑦ 人各認祖宗科牌⁽¹⁾⁽²⁾。太上爲祖。釋迦爲宗。夫子爲科牌。〔一四裏〕
人オノオノ祖宗科牌ヲ認ム。太上ハ祖ナリ。釋迦ハ宗ナリ。夫子ハ科牌ナリ。

(1) 祖宗は、無論、儒教でよく使う言葉であり、例えば次の如し。

《禮記・祭法》「有虞氏禘黃帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯……」、疏「祖、始也。言爲道德之初始、故云祖也。

『重陽真人金闕玉鎖訣』について

宗、尊也。以有德可尊、故云宗。」

《孔子家語・廟制》古者祖有功而宗有德、謂之祖宗者、其廟皆不毀。

(2) この意味未詳。

④ 三教者、是隨意演化衆生、皆不離於道也。古人言曰、世間性命事大⁽¹⁾。修行者、生老病死苦、今人各不曉眞道、⁽³⁾往往著空盡落空。現在亦不能了、何言過去之事⁽⁴⁾。又聞《達磨經》云「過去非言實、未來不爲眞。」太上煉九轉還丹⁽⁶⁾、⁽³⁾今人去病疾、了生死。夫子教仁義禮智信、恐人招業在身。令人修此亦能治其疾病。「一五表裏」

三教ハ、隨意ニ衆生ヲ演化シテ、皆、道ヲ離レザルナリ。古人ノ言ニ曰ク、世間、性命ノコト大ナリ。修行ハ、生老病死苦、人ヲシテオノオノ眞道ヲ曉^{サト}ラシメズ、往往ニシテ空ニ著イテ盡^{コトゴト}ク空ニ落トサシム。現在モマタ了ス能ワズシテ、何ゾ過去ノコトヲ言ウヤ。⁽⁴⁾マタ聞ク《達磨經》ニ云ク「過去ハ實ヲ言ウニ非ズ、未來ハ眞タラズ。」太上ハ九轉ノ還丹ヲ煉リ、人ヲシテ病疾ヲ去ラシメ、生死ヲ了セシム。夫子ハ仁義禮智信ヲ教エ、人ノ身ニ業ヲ招クヲ恐レサシ、人ヲシテコレヲ修メテマタ能クソノ疾病ヲ治サシム。

(1) 典據未詳。

(2) この前後、字を脱するか。大は夫の誤りで、下にかかるものか。

(3) 今は令の誤りであろう。讀み下しは令に直したものである。

(4) 現在と過去について、また、次のような説明がある。

心經云、能小能大、未言過去、先說見在。過去者是果、見在者是功。又云、功成果滿、未言眞、是說假。

惟一靈是眞。肉身四大是假。相借煉假、成眞、感合爲一。〔三表〕

今人者、多修外道、不修內道。見在道過去法。〔一八表〕

前の引用文について。心經は未詳である。

四大について。《授丹陽二十四訣》〔藏七九六冊、三表〕に「天有四時、人有四大。天有地水火風、人有心精氣身。……人有四時、四肢・四大、是也」とあるほか、《重陽全眞集》卷二・一〇表《活死人墓贈寧伯功》に「活死人兮活死人、自埋四假、便爲因」、同一〇裏に「火風地水要知因、墓中日服眞丹藥」、同七裏《金丹》に「本來眞性喚金丹、四假爲鑪鍊作團」、《重陽教化集》卷二・七表《引丹陽上街求乞》の《丹陽繼韻》に「火風地水合爲肌、只是愚迷走骨屍」など、かなり頻見される。

後の引用文について。見在道過去法は、上と較べて「不修見在道、多修過去法」とするべき所か。

(5) この經未詳。《達摩多羅禪經》卷上〔正一五、六一八上〕に「出息已過去、彼則不可見」などの表現があるが、ここの文は見あたらない。また、《達摩大師任世留形內眞妙用訣》〔雲笈七籤卷五九、諸家氣法部四〕にもこの表現はない。

(6) 《金丹大成集》、《金丹問答》に、

問曰、何謂九還。答曰、金生數四、成數九。還者、自上而還下。九乃老陽之數。

とある。

③ 三教内行法門者、盡各治於疾病也。更有能超生者。〔二二表〕

三教ノ内、法門ヲ行ウ者ハ、盡クオノオノ疾病ヲ治スナリ。更ニ、能ク生ヲ超ユル者アリ。

④ 自從三教既寂已後、一切男女、在愛河内煎煮、苦海漂沉、受其煩惱、六道沉淪、不生不死去住。三教聖主、三界聖母、却來救度兒女。名號記顯現、分明壽印、信爲其勘同。解曰、一身爲全。受戒者、爲記心悟。了達者、爲火。《隨求經》云「如意寶印、從心、顯名爲號。」有十號者、爲十善。十號者、爲能人。一號元修、二號轉分明、三號通三界、四號長生、五號光明現、六號意通、七號全身主、八號福祿增、九號天元修、十號者、爲能人。一加性十號、無漏功德自然成。〔一四裏—一五表〕

⑤ 三教既ニ寂スルヨリ已後、一切ノ男女、愛河ノ内ニアリテ煎煮セラレ、苦海ニ漂沉シ、ソノ煩惱ヲ受ケ、六道ニ淪シ、生ゼズ落チズ去住ス。三教ノ聖主、三界ノ聖母、却ッテ來リテ兒女ヲ救度ス。名號ノ記スルコト顯現ナレバ、壽印ヲ分明スルコト、マコトニソノ勘同ヲナス。解シテ曰ク、一身ヲ全トナス。受戒者ヲ心悟ニ記ストナス。了達者ヲ火トナス。《隨求經》ニ云ク「如意ノ寶印、心ニ從イ、名ヲ顯ワシ號トナス。」十號ナルモノアリ、十善ヲナス。十號ハ能人トナス。一號ハ元修、二號ハ轉分明、三號ハ通三界、四號ハ長生、五號ハ光明現、六號ハ意通、七號ハ全身主、八號ハ福祿增、九號ハ天元修、十號ハ能人トナス。一ニ性十號ヲ加エ、無漏ノ功德自然成ル。

⑥ この節、甚だ文意がとりにくい。以下の句讀、讀み下しは、暫定的である。

⑦ 佛教の六道をとったものであろう。姚秦・鳩摩羅什譯《妙法蓮華經》序品第一〔正九、一二〕に「六道衆生、生死所趣」とあるが、六道は即ち六趣に同じで、天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生道をいう。

(3) この箇所、とくに難解であり、句讀は暫定的である。

(4) 唐律の檀輿に「依令、差兵十人以上、竝須銅魚勅書、勘同」とあるように、割符を對照して點檢することであるが、ここでは、救われるべき人間の名實の一致を行うことであろう。

(5) 心悟は、或いは了達に係るものか。

(6) 出典不明。唐・不空譯《普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經》〔正二〇、六二〇中〕に「爾時、婆伽梵說此普遍光明……陀羅尼經已。告大梵等言。……若能讀誦受持在心、當知是人即是金剛堅固之身」などとあるが、この引用文はなく、また十號と結びつけてもいない。

(7) 《眞仙直指語錄》卷上九表裏に十勸の説明があるが、十善と必ずしも重ならない。

(8) 唐・勝莊撰《梵綱經菩薩戒本述記》〔正六〇—二〕に「釋迦牟尼、大唐翻云能寂、舊翻亦云能滿、亦云能仁」「一二三C」とあり、能仁はまた能人である。唐・善導集記《觀無量壽佛經疏》玄義分〔正三七、二四六中〕に「安樂能人、顯彰別意弘願」とある。ここは無論、釋迦ではなく、修行の完成者の意であろう。なお、十號の意味内容は未詳である。この「十號者、爲能人」は或いは後文と重複した衍文かもしれない。

(9) 加性は或いは誤倒か。

(3) 附隨事項

① 導師の必要性

『重陽真人金關玉鎖訣』について

告我師願求妙訣。須索意自息、肯捨重金淨財。第一捨身布施。第二將花獻師。第三令膳而供養。解曰、捨身布施者、若見師長父母危時、捨命求命。將花獻師者、若師長須打罵、須將喜笑迎之、面上無嗔怒。令膳而供養者、食有好味、先奉其師。此名三布施也。仙人言曰「堅者爲道歡喜者爲緣。若求師不動、豈至於道。」呂翁曰「不因師指、此事難知」、又云「學而不知者、不學而悟之。學而不從師、名爲盜學也。」是法中賊。若掩祖上師、得促自己壽、與常人同例、自揚己得、是斷行做作。此人可以成道乎。其人謂輕師慢法、不堪爲師。未學修行先持救濟他人者、爲救自己者、憑功德行。〔一四表裏〕

我ガ師ニ告ゲテ妙訣ヲ願求ス。スベカラク意オノズカラ息シ、重金淨財ヲ肯捨スルヲ索ムベシ。第一、捨身布施。第二、將花獻師。第三、令膳シテ供養。解シテ曰ク、身ヲ捨テル布施トハ、モシ師長・父母ノ危ヲ見ル時、命ヲ捨テテ命ヲ求ム。花モテ師ニ獻ズトハ、モシ師長スベカラク打罵スレバ、スベカラク喜笑モテコレヲ迎エ、面上ニ嗔怒ナシ。令膳シテ供養ストハ、食ニ好味アラバ、マズソノ師ニ奉ズ。コレ、三布施ト名ヅクルナリ。仙人ノ言ニ曰ク「堅者ハ道ヲナス、歡喜ハ緣ヲナス。」モシ師ヲ求ムルコト勤ナラザレバ、豈ニ道ニ至ランヤ。」呂翁曰ク「師ノ指ニ因ルニアラザレバ、コノ事知リ難シ」、マタ曰ク「學ビテ知ラザル者、學バズシテコレヲ悟ル。學ビテ師ニ從ワザル、名ヅケテ學ヲ盜ムトナス。」コレ法中ノ賊ナリ。祖ヲ掩イ師ヲ上ギ、自己ノ壽ヲ促スルヲ得ルハ、常人ト同例ニシテ、ミズカラ己ノ得ヲ揚グ、コレ做作ヲ斷行スルナリ。コノ人、道ヲ成スベキカ。ソノ人、師ヲ輕ンジ法ヲ慢ニシ、師トナルニ堪エズ。未ダ修行ノマズ他人ヲ救濟スルヲ持スルモノニシテ、自己ヲ救ウ者タルハ、功德ノ行ニ憑ルコトヲ學バザルナリ。

(1) 須字、衍か。

(2) 典據未詳。文章に誤りあるか。堅は賢か。

(3) 呂純陽〈沁園春〉第三首。《呂祖全書》下七七一頁。また、《傳道集》〈論證驗第一八〉に「鍾曰……若遇明師而得法、行大法以依時、何患驗證不有也」とあるなど、師の必要を説くもの多し。

(4) 出典不明。前半の意味未詳。

(5) 上は《周語》中「書曰『民可近也、而不可上也』」の吳・韋昭注「『書』、逸書。……『不可上』、不可高上。上、陵也」の意味と同じであろう。

(6) その者に對して師となるのが困難である、の意味であろう。

⑤ 修行の禁忌

大修行人、後有禁忌之文。訣曰、男女五月六月、宜清靜。大忌十一月十二月、宜清靜。又男子五月六月、大殺之月、勿近婦人爲五勞七傷。男損性命、女人損性者、是精血氣也。⁽²⁾損者、令人左癱右瘓、⁽³⁾赤白帶下。⁽⁴⁾若損五行眞氣、爲勞、損七寶、爲傷。⁽⁵⁾「二三裏」

大⁽¹⁾(ソレ?) 修行ノ人、後ニ禁忌ノ文アリ。訣シテ曰ク、男女、五月六月、宜シク清靜ナルベシ。大イニ十一月十二月ヲ忌ミ、宜シク清靜ナルベシ。マタ、男子ノ五月六月ハ、大殺ノ月ニシテ、婦人ニ近ヅキテ五勞七傷ヲナスコト勿レ。男ハ性命ヲ損ズ。女人ノ性ヲ損ズルハ、精氣血ナリ。⁽²⁾損トハ、人ヲシテ左癱右瘓⁽³⁾セシメ、赤白帶下⁽⁴⁾セシムルナリ。モシ五行ノ眞氣ヲ損ズレバ勞トナシ、七寶ヲ損ズレバ傷トナス。⁽⁵⁾

(1) 大は夫の誤りか。

(2) 句に誤りあるか。男子損精・婦人損血、損了精氣血三寶、精爲性・血爲命などが混亂したものか。

(3) 癱瘓は所謂中風のこと。

(4) 赤白は赤痢、帶下は婦人病。

(5) 《太上道祖日用真經》について、宋・劉玉《樵陽子語錄》〔自・四ノ五〕に『人身中有七寶』……故曰心腎血氣腦精髓、是爲七寶』とある。また、陶弘景《養性延命錄》卷下《服氣療病篇第四》〔自・六ノ四〕に、五勞者、一曰志勞、二曰思勞、三曰心勞、四曰憂勞、五曰疲勞。五勞則生六極……六極卽爲七傷、七傷故變爲七痛、七痛爲病、……とある。

(4) 修行の種類と神仙の種類

① 修行の種類

第一大煉九轉還丹之法。⁽¹⁾有黃芽穿膝之法。⁽²⁾射九重鐵鼓之法。太子遊四門之法。有金鞭指輪之法。有蘆芽穿膝之法。有軒轅跨火之法。有玉女摸身之法。有鍾離背劍之法。⁽³⁾有呂翁釣魚之法。有陳希夷大睡之法。⁽⁴⁾〔三三表〕

第一、大イニ九轉ノ還丹ヲ煉ルノ法。⁽¹⁾黃芽膝ヲ穿ツノ法アリ。九重ノ鐵鼓ヲ射ルノ法。⁽²⁾太子四門ニ遊ブノ法。金鞭輪ヲ指スノ法アリ。蘆芽膝ヲ穿ツノ法アリ。軒轅火ニ跨ガルノ法アリ。玉女身ヲ摸スルノ法アリ。鍾離劍ヲ背ニスルノ法アリ。⁽³⁾呂翁魚ヲ釣ルノ法アリ。陳希夷大イニ睡ルノ法アリ。⁽⁴⁾

(1) 二(2)③ (1) 参照。

(2) 二(2)③ (3) 参照。

(3) 《仙術秘庫》〔自・四ノ四〕卷四《仙家實驗談》一六、鍾離權長生真訣仙術の條下に、「老人授以長生真訣、及金丹火候、青龍劍法」とあるが、これに關係あるかどうか未詳である。また、《旁門小術錄》〔自・附刊〕の第二二首に「蘇秦背劍真難過」の表現があり、注〔陳撝寧評注〕に「用一蛾眉樹、改成蛾眉板、凭著壁頭、以拱處抵背……」とあり、一種の體操の説明となっている。

(4) 《仙術秘庫》卷二《仙家攝生術》二九、睡養法仙術参照。また、火西月編《呂純陽先生編年詩集》卷三〔呂祖全書・下、五四五頁〕に「陳希夷睡訣三十二字、名蟄龍法。其詞云『龍歸元海、陽潛於陰。人曰蟄龍、我却蟄心。默藏其用、息之深深。白雲高臥、世無知音。』真得睡仙三昧者、因題一律表之」とある。

なお、《丹陽語錄》に、「三十六道引、二十四還丹、此乃入道之漸門、不可便爲大道」〔八表〕とある。

⑥ 修行法の一つ

日月星辰三消、血氣精衰也。⁽¹⁾三消是、山崩、海竭、地裂。一日十二時辰中、得坐莫越。⁽²⁾其人功成果滿。男子鍊形如童男、女子鍊形如童女。經云⁽³⁾「形神俱妙、與道合真。」此是、抽胎換骨之法。〔二〇表裏〕

日月星辰三消スルハ、血氣精衰エルナリ。⁽¹⁾三消ハ、山崩レ、海竭レ、地裂クルナリ。一日十二時辰ノ中、坐リテ越ユルナキヲ得。⁽²⁾ソノ人、功成リ果滿ツ。男子形ヲ鍊ルコト童男ノ如ク、女子形ヲ鍊ルコト童女ノ如シ。經ニ云ク⁽³⁾「形神トモニ妙ニシテ、道ト合シテ眞ナリ。」コレ、抽胎換骨ノ法ナリ。

(1) 天人相關の理論とも、象徴的表現とも解せる。なお、《授丹陽二十四訣》には「天有三才、日月星。地有三才、乙丙丁。人有三才、精神炁、是也」とある。

(2) この意味未詳。

(3) この表現は諸書に散見するが、典據未詳。例えば《五篇靈文》にもあり。

◎ 神仙の種類

問曰、「大道之中、離幾等神仙。」⁽¹⁾解曰「聞《傳道集》中、有五等神仙。⁽²⁾第一、不持戒、不斷酒肉、不殺生、不思善、爲鬼仙之類。第二、養真氣長命者、爲地仙。第三、好戰爭、是劍仙。第四、打坐修行者、爲神仙。⁽⁴⁾第五、孝養師長父母、六度、萬行方便、救一切衆生、斷除十惡、不殺生、不食酒肉、邪非偷盜、⁽⁵⁾出意同天、心正直無私曲、名曰天仙。」

〔一三表〕

問イテ曰ク「大道ノ中、幾等ノ神仙アルヤ。」⁽¹⁾解シテ曰ク「聞ク《傳道集》中五等ノ神仙アリト。⁽²⁾第一、戒ヲ持サズ、酒肉ヲ斷ゼズ、殺生セズ、⁽³⁾善ヲ思ワズヲ、鬼仙ノ類トナス。第二、眞氣ヲ養イテ長命ナル者ヲ、地仙トナス。第三、戰爭ヲ好ム、コレ劍仙ナリ。第四、打坐修行スル者ヲ神仙トナス。第五、⁽⁴⁾師長父母ヲ孝養シ、六度シ、ヨロズ方便ヲ行イテ一切ノ衆生ヲ救イ、十惡ヲ斷除シ、殺生セズ、酒肉ヲ食ワズ、邪非偷盜、⁽⁵⁾意ヲ出スコト天ニ同ジク、心正直ニシテ私曲ナシ、名ヅケテ天仙トイウ。」

(1) 離字、有字の誤りか。

(2) 《傳道集》《論眞仙第二》に「仙有五等者、鬼仙・人仙・地仙・神仙・天仙之不等、皆是仙也」とあり、五

等の内容が異なる。その他、《五篇靈文》序の王重陽の注、《葛仙翁至道心得》〔自・九ノ六〕《五品仙說》など、すべて現行の《傳道集》に同じであり、劍仙を擧げているものはない。また、《眞仙直指語錄》卷下・一二表、《清和尹眞人語》に「又云、馬師父云『仙有四等、鬼仙・人仙・地仙・神仙』とあるが、人仙を擧げている點、やはり《金關玉鎖訣》と違う。なお、《重陽教化集》卷一・一七表《報師恩》に「地仙中仙與天仙、認得三田月正圓」とあり、別の數え方もあることがわかるが、これは三田に對應させたもので、五等の神仙とは別のものであらう。

(3) 不字、あるべからず。

(4) 一⑥參照。

(5) 邪字上、不爲の如き字を脱するか。或いは偷盜ヲ邪非トシの意味か。

本章において、まず三乗の段階論が示されるが、現在が強調されている點が注目されよう。觀念的に現在を超越するという佛教的發想は、ここにはない。次に、三乗と重なって三教の鼎立が論述されるが、それは文字通りの鼎立であつて、三教間の段階や緊張は認められない。然らば、三教の合一といっても、思想的には極めて安易・淺薄なものである。

具體的な修行方法については、未詳のものが多く、それは、象徴的・比喩的な特殊用語が多いことによるが、それ故にまた、導師の必要を説いたものも多い。

神仙の最上である天仙の性格づけが、前章で検討した修行の前提と重なる點、これを含めて本章の諸論述を形式的

なものとする所以である。口訣の核心は、次章に纏める。

三 内容的問題

本章は《金關玉鎖訣》の核心をなす内丹の教理を集めて検討する。具體相としたものは、修行時における身體内部の活動を論じたものであり、資料の特徴は、ここに最もよく出ている。數節に分った始めのものは、全般的な説明であり、次に、順次修行の核心に迫り、行功論がその頂点をなす。效用面としたものは、修行の目的や直接の効果を論じたものであり、修行者の關心が何に向いていたかがわかる。

(1) 具體相

① 五藏、五行、八卦

① 訣曰。第一、身中東西、要識庚甲卯酉。第二、身中南北、要識坎離鉛汞。訣曰、庚甲卯酉者、爲晝夜⁽¹⁾。甲卯者、是肝之氣。八節中、立春・春分。口中爲津也。庚酉者、是肺之氣。八節中、立秋・秋分。口中爲液也。坎離者、寒暑⁽¹⁾。離鉛者、是身中心氣。八節中、立夏・夏至。身中爲血也。坎汞者、是腎中氣。八節中、立冬・冬至。身中爲精也。精生魄、血生魂。精爲性、血爲命。人了達性命者、便是修行之法也。〔二裏一二表〕

訣ニ曰ク。第一、身中ノ東西、庚甲卯酉ヲ識ルヲ要ス。第二、身中ノ南北、坎離鉛汞ヲ識ルヲ要ス。訣ニ曰ク。庚

甲卯酉トハ、晝夜ヲナス⁽¹⁾。甲卯ハ肝ノ氣ナリ。八節中、立春・春分。口中、津ヲナスナリ。庚酉ハ肺ノ氣ナリ。八節中、立秋・秋分。口中、液ヲナスナリ。坎離ハ寒暑ナリ⁽¹⁾。離鉛ハ身中ノ心氣ナリ。八節中、立夏・夏至。身中、血ヲナスナリ。坎汞ハ腎中ノ氣ナリ。八節中、立冬・冬至。身中、精ヲナスナリ。精、魄ヲ生ジ、血、魂ヲ生ズ。精ハ性トナリ、血ハ命トナル。人ニシテ性命ニ了達スルハ、スナワチ眞ノ修行ノ法ナリ。

(1) 《傳道集》《論日月第四》に「東西出沒以分晝夜、南北往來以定寒暑」とある。また、《重陽全真集》卷一・一五表裏の《修行》に「水火相逢開正路、木金間隔定長生、黑鉛赤汞分南北、白虎青龍換甲庚」とある。なお、これらについて、節尾に一括して表示しておいた。

⑥ 又問七返。訣曰、「咽神水到氣額中、肺化爲液。善治諸咳嗽。漸生於魄⁽¹⁾。」又云、「咽津到心上。令人心開悟解。又是洗心神水、洗心見性。」頌曰、「見花五葉開、步步入仙臺。」「神水化血。又、咽神水到肝。肝爲木、假名爲青龍。」

龍得水時、必旺。善治一切眼氣。化爲津。又咽神水到脾。脾爲土。土得水者、能生黃芽⁽⁴⁾。〔九表〕

マタ七返ヲ問ウ。訣シテ曰ク、「神水ヲ咽シテ氣額中ニ到ル。肺、化シテ液トナス。モロモロノ咳嗽ヲ善治ス。漸ヤク魄ヲ生ズ。」⁽¹⁾マタ云ク「津ヲ咽シテ心上ニ到ル。人ヲシテ心ヲ開キ悟解セシム。マタ、洗心ノ神水、洗心ノ見性ナリ。」頌シテ曰ク、「花ヲ見ルニ五葉開キ、步步ニ仙臺ニ入ル。」「神水、血ニ化ス。マタ、神水ヲ咽シテ肝ニ到ル。肝、木トナス。カリニ名ヅケテ青龍トナス。龍、水ヲ得ル時カナラズ旺ンナリ。一切ノ眼氣ヲ善治ス。化シテ津トナス。マタ、神水ヲ咽シテ脾ニ到ル。脾、土トナス。土、水ヲ得ルモノ、能ク黃芽ヲ生ズ。」⁽⁴⁾

(1) 魄は精・腎に關係するもの故^(a)、この四文字、錯入であらう。

(2) 津は神水に作るべきもの。

(3) 以下、文章に錯誤あるか。甚だ不完全である。

(4) 或いは次(次節^(a))に續けるべきか。いずれにせよ甚だ不完全である。

③ 問曰、金公⁽¹⁾是神。黃婆⁽¹⁾是炁。陽炁⁽¹⁾是嬰兒。陰炁⁽²⁾是姤女。青龍者、是肝之炁也。白虎者、是肺之炁也。坎離者、是精血。〔二七表裏〕

問イテ曰ク。金公ハ神ナリ。黃婆ハ炁ナリ。陽炁ハ嬰兒ナリ。陰炁ハ姤女ナリ。青龍ハ肝ノ炁ナリ。白虎ハ肺ノ炁ナリ。坎離ハ精血ナリ。

(1) 問の内容が脱落したか、或いは、問字は答字の誤りであろう。後者なら、問は脱落している。

(2) 〔授丹陽二十四訣〕一裏には「金公是心、黃婆是脾。……嬰兒是肝、姤女是肺」とあり、こと異なる。
〔金關玉鎖訣〕が王重陽撰であることを疑わしめる一因となろう。

④ 陰陽顛倒、五行眞訣⁽¹⁾。五行含金木水火土。春木旺。內木不旺、人多病眼疾。夏火旺。內火不旺、人多瀉痢。秋金旺。內金不旺、人多咳嗽。冬水旺。內水不旺、人多疝氣。碑爲土。四季分⁽²⁾了脾氣。陰陽顛倒返復也。五行各有相尅。金尅木、木尅土、土尅水、水尅火、火尅金。水火者、是陰陽也。一陰一陽、眞道也⁽⁴⁾。精血也。人有萬病、盡不干五臟之事、都是損了父母精血。丹田弱、便生病疾也。急收神定性。〔二〇裏〕

陰陽顛倒ス、五行ノ眞訣⁽¹⁾。五行ハ金木水火土ヲ含ム。春ハ木旺ンナリ。內木旺ンナラザレバ、人多ク眼疾ヲ病ム。

夏ハ火旺ンナリ。内火旺ンナラザレバ、人多ク瀉痢ス。秋ハ金旺ンナリ。内金旺ンナラザレバ、人多ク咳嗽ス。冬ハ水旺ンナリ。内水旺ンナラザレバ、人多ク疝氣ス。碑ハ土トナス。四季ハ脾氣ヲ分了ス。陰陽顛倒シテ返復スルナリ。五行オノオノ相尅アリ。⁽³⁾金、木ニ尅チ、木、土ニ尅チ、土、水ニ尅チ、水、火ニ尅チ、火、金ニ尅ツ。水火トハ陰陽ナリ。一陰一陽、眞道ナリ。⁽⁴⁾精血ナリ。人、萬病アルハ、盡ク五臟ノコトニ干セズ、⁽⁵⁾スベテ父母ノ精血ヲ損了ス。丹田弱ク、スナワチ病疾ヲ生ズルナリ。急ギ神ヲ收メ性ヲ定メヨ。

(1) 後出の「陰陽顛倒返復也」を参照すれば、陰陽顛倒とは、五行が無限に循環することであろう。ただし、五行には順行と顛倒があり、《傳道集》《論五行第六》に、

五行順行、氣傳子母。自子至午、乃曰陽時生陽。五行顛倒、流行夫婦、自午至子、乃曰陰中煉陽、……

とある。

(2) 碑は脾の誤り。

(3) 《金丹大成集》《金丹問答》に、
問五行相尅。

答曰《金碧經》《金碧古文龍虎上經、訣不輒造章第一〇》曰、金木相伐、水火相尅。土旺金鄉、三物俱衰。四海輻輳。以致太平、並由中宮土德之功也。

とある。

(4) 元來は《易・繫辭傳上》の「一陰一陽之謂道」に由來するのであろうが、《翠虛篇》《丹基歸一論》に「一陰一陽之謂道、道即金丹也、金丹即道也」と金丹的に使われている。ここでは、内丹的な解釋をされているの

『重陽真人金關玉鎖訣』について

であらう。

(5) 「盡不干……」は、三②①③(2)にも使われるが、“……ばかりでなく”の意味であらう。

⑤ ロ含藏眞氣。眞氣中、分八卦⁽¹⁾。艮爲立春、震爲春分、巽爲立夏、離爲夏至、坤爲立秋、兌爲秋分、乾爲立冬、坎爲冬至。八卦中、各生陰陽。陰陽中、各分寒暑。訣曰、咽津爲陰、隨後行氣乃爲陽。〔八裏―九表〕

ロニ眞氣ヲ含藏ス。眞氣中、八卦ヲ分カツ。⁽¹⁾ 艮ヲ立春トナシ、震ヲ春分トナシ、巽ヲ立夏トナシ、離ヲ夏至トナシ、坤ヲ立秋トナシ、兌ヲ秋分トナシ、乾ヲ立冬トナシ、坎ヲ冬至トナス。八卦中、オノオノ陰陽ヲ生ズ。陰陽中、オノオノ寒暑ヲ分カツ。訣ニ曰ク、津ヲ咽ムヲ陰トナス。隨後、氣ヲ行ラスヲスナワチ陽トナス。

(1) この節は、氣のめぐりを卦に配當したものであるが、《靈寶壘法》上、《匹配陰陽第二》〔精・六〕に
以一日比一年。以一日用八卦、時比八節。

子時、腎中氣生。

卯時、氣到肝。肝爲陽。其氣旺、陽升以入陽位。春分之比也。

午時、氣到心。積氣生液。夏至陽升到天、而陰生之比也。

午時、心中液生。

酉時、液到肺。肺爲陰。其液盛、陰降以入陰位。秋分之比也。

子時、液到腎。積液生氣。冬至陰降到地、而陽生之比也。

とあり、また《五篇靈文》〈玉液章第一〉王重陽注〔七表〕に、

神屬南方火。火在卦爲離。

精屬北方水。水在卦爲坎。

魂屬東方木。木在卦爲震。

魄屬西方金。金在卦爲兌。

意屬中央土。土在卦爲坤。

とある。

① 問曰、「病從何生。」訣曰、「萬病皆從八節不正之氣而生。」問曰「何者八邪。」訣曰、「八卦中陰陽不順、是八節中氣、令人入邪者。是飢飽勞役、風寒暑濕。飢來痛飽、寒極憂心。遠行困倦、及冷熱身醉、亦不可行功、變成大病也。」〔一三裏——一四表〕

問イテ曰ク「病ハ何ニヨリテ生ズルヤ。」訣シテ曰ク「萬病ハ、皆八節不正ノ氣ニヨリテ生ズ。」問イテ曰ク「何者ゾ、八邪トハ。」訣シテ曰ク「八卦中、陰陽不順ナレバ、八節中ノ氣、人ヲシテ邪ニ入ラシムルモノナリ。コレ飢飽勞役、風寒暑濕ナリ。飢ニ來タレバ飽ルヲ痛ミ、寒極マレバ心ヲ憂ウ。遠行シテ困倦シ、冷熱ニ身醉フニ及ンデ、マタ功ヲ行ウベカラズ、變ジテ大病ヲ成スナリ。」

(1) この訣、意味とり難し。讀み下しは暫定的である。

以上のような五行・八卦の説を、整理して圖示すれば、およそ次のようになる。

五行	四季	八節		五臟		病氣	體液		八卦	方位	色			
木	春	立春 春分	甲卯	肝	青龍	眼疾	津	晝	艮震	東	青			
火	夏	立夏 夏至	離鉛	心		瀉痢	血	暑	巽離	南	赤	魂	命	
土	四季分了			脾						中央	黃			
金	秋	立秋 秋分	庚酉	肺	白虎	咳嗽	液	夜	坤兌	西	白		魂	
水	冬	立冬 冬至	坎汞	腎		疝氣	精	寒	乾坎	北	黑	魄	性	陰

だが、五行の論だけでは不十分である。《悟真外篇》《總論金丹之要三》に「大凡金丹之道、學者尋五行其未矣。當知交會之際、恍惚杳冥……」とあるように、身體内部に活動させねばならない。それが次の水火論以下である。

② 水 火 論

① 腹爲大小腸、九曲至臍。中一寸三分方圓。一寸左青、右白、前赤、後黑、中黃。戊己名爲丹田。田内一座宮、宮中名曰黃庭。宮中有一爐、名爲丹爐。爐上坐定一隻金鼎。下頻進眞火、上頻添神水。水火者、坎離也。……進火時、上用水洗、下用火煨。經云「身下出火、身上出水。」其上合下閉、乾坤相合、教龍盤金鼎、使虎遶丹田者、爲妙、名曰爐刀圭也。若人行此功者、永得安樂長生也。〔九表一〇表〕

腹ハ、大小腸ヲナシ、九曲シテ臍ニ至ル。中ハ一寸三分ノ方圓ニシテ、一寸ノ左ハ青、右ハ白、前ハ赤、後ハ黒、中ハ黃。戊己、名ヅケテ丹田トナス。田内一座ノ宮、宮中名ヅケテ黃庭トイフ。宮中、一爐アリ、名ヅケテ丹爐トナ

ス。罏上、一隻ノ金鼎ヲ坐定ス。⁽⁷⁾下ハ頻リニ眞火ヲ進メ、上ハ頻リニ神水ヲ添エ⁽⁸⁾ル。水火トハ、坎離ナリ。……火ヲ進ムル時、上ハ水ヲ用ツテ洗イ、下ハ火ヲ用ツテ煨タム。⁽⁹⁾經ニ云ウ「身下火ヲ出シ、身上水ヲ出ス。」⁽¹⁰⁾ソレ、上合シ下閉ジ、乾坤相合シテ、⁽¹¹⁾龍ヲシテ金鼎ヲ盤^メラシメ、虎ヲシテ丹田ヲ遶^メラシムルハ、⁽¹²⁾妙トナシ、名ヅケテ罏刀圭トイウナ⁽¹³⁾リ。モシ人コノ功ヲ行エバ、永ク安樂長生ヲ得ルナリ。

(1) 水火の論について、丘長春《大丹直指》卷上二裏―三表に説明あり。

(2) 丘長春《大丹直指》卷上二表に「臍内一寸三分、所存元陽眞氣」とある。

(3) 《悟眞篇正義》卷上に「戊己自居生數五」を注して「其戊己爲土、而土之生數、自居其五」とある。また、《漁莊錄》《眞土章》に「眞土者、戊己之土也。鉛有戊土、汞有己土。鉛汞交媾、產出白金」とある。

(4) 丘長春《大丹直指》卷上二表に「但臍在人身之中、名曰中宮命府、混沌神室、黃庭丹田、……異名甚多」とある。

(5) 《傳道集》《論鉛汞第一〇》に、

黃庭者、脾胃之下、膀胱之上、心之北、而腎之南、肝之西、而肺之東。上清下濁。外應四色。量容二升。路通八水。……

とあり、また《金丹大成集》《金丹問答》に

問黃庭正在何處。

答曰、膀胱之上、脾之下、腎之前、肝之左、肺之右也。

とある。

『重陽眞人金闕玉鎖訣』について

(6) 爐は爐である。《集韻》によれば、どちらも龍都切である。《金丹大成集》《金丹問答》に次のように説明される。

問曰、何謂爐。

答曰、上品丹法、以神爲爐、以性爲藥、以定爲水、以慧爲火。

中品丹法、以神爲爐、以氣爲藥、以日爲火、以月爲水。

下品丹法、以身爲爐、以氣爲藥、以心爲火、以腎爲水。

又有偃月爐、玉爐。

然らば、この説明は、《金丹大成集》による限り、下品丹法ということになる。

(7) 《金丹大成集》《金丹問答》に次のようにある。

問曰、何謂鼎。

答曰、鮑真人云、金鼎、近泥丸。黃帝鑄九鼎。是也。

(8) 眞火、神水について、次のような説明がある。

《大丹直指》卷上「三裏」心火運用、方爲眞火。

《金丹大成集》《解註崔公入藥鏡》「水眞水、火眞火」、離中有陰、則心中之液、乃眞水也。坎中有陽、則腎中之氣、乃眞火也。此一身之眞水火也。

《金丹大成集》《金丹問答》火者、太陽眞氣、乃坎中之陽也。……

腎屬坎。三陰中有陽、乃眞陽也。心屬離。三陽中有陰、乃眞陰也。

《悟眞篇正義》卷下「二八誰家姪女、九三何處郎君、自稱木液與金精、遇土却成三性」、然姪女之汞、是謂木液、郎君之鉛、是謂金精。而木液者、乃神水、金精者、乃神火也。但此二物、若遇眞土、却合成三性。

「華池神水眞金」、神水者、即靈汞也。《翠虛篇》所謂神水根基與汞連、是也。

(9) 進火について、丘長春《大丹直指》卷上「一表に、

華陽施眞人曰、心爲五陽之主、腎爲五陰之主。五陰升而爲水、五陽降而爲火。當用乾之時、以心氣下入丹田、號曰進火。

とある。水火の上下については、前注以降、明かであろうが、馬丹陽の言にも次のようにある。

《眞仙直指語錄》卷上「三表」心液下降、腎氣上升、至於脾。念絕想、神自靈、丹自結、仙自做。

《丹陽語錄》「四表裏」雖歌詞中、每詠龍虎嬰姪、皆寄言爾。是以要道之妙、不過養氣。……夫心液下降、腎氣上昇、至於脾。元氣氤氲不散、則丹聚矣。若肝與肺、往來之路也。

なお、馬丹陽のこのような考え方は、「修命之說」と評價されている。⁽¹¹⁾

(10) この經は金丹道關係のものであるが未詳である。なお、劉宋・求那跋陀羅譯《過去現在因果經》卷四「正三、六五〇下」に、

即語迦葉、汝今宜應現諸神變。于時迦葉、即昇虛空。身上出水、身下出火。身上出火、身下出水。或現大身、滿虛空中。

とあるが、ことと關係があるかどうか不明である。

(11) 三(1)④⑤(12)にも「上合下閉、乾坤相合」とある。上下の關を閉ざすことであろう。

(12) この龍虎は、所謂青龍白虎ではなく、次のように説明される。

『重陽眞人金關玉鎖訣』について

丘長春《大丹直指》卷上「八表」龍虎非是肝肺之像、乃心腎之眞陰陽也。

《傳道集》《論五行第六》龍非肝也。乃陽龍。陽龍出在離宮眞水之中。虎非肺也。乃陰虎。陰虎出在坎位眞火之中。

また、これらについて、《重陽全眞集》に、次のような例がある。

龍吟引起虎咆哮、雪浪兼風旋旋拋。滌蕩一靈添到瑩、調和二氣便相交。〔修行、卷一・一四裏〕
何用丹田金虎繞、不須寶鼎玉龍盤。叱廻鉛汞應清靜、換過陰陽愈喜權。〔修行、卷一・一五表〕

(13) 刀圭については、本節⑥①参照。

⑥ 行功不退、變萬邪皈正。如行功時、飢食金飴、渴飲玉漿。冷時進火、熱時進水。火者、是眞陽。水者、是眞陰⁽¹⁾。此功者、是抽添加減之法。訣曰、抽者、從上收眞炁。添者、從下進暖炁、入丹田。若人腎宮暖者、萬病消除。〔二〇表〕

功ヲ行イテ退カズ、萬邪ヲ變ジテ正ニ皈ス⁽²⁾。モシ功ヲ行ウ時ハ、飢ユレバ金飴ヲ食シ、渴スレバ玉漿ヲ飲ム。冷時ハ火ヲ進メ、熱時ハ水ヲ進ム。火トハ眞陽ナリ。水トハ眞陰ナリ。コノ功ハ、抽添加減ノ法ナリ。訣ニ曰ク、抽トハ、上ヨリ眞炁ヲ收ム。添トハ、下ヨリ暖炁ヲ進メテ、丹田ニ入ル。モシ人ノ腎宮暖カキハ、萬病消除ス⁽³⁾。

(1) 眞陽眞陰については、④(8)参照。

(2) 《傳道集》《論抽添第一》に、

所謂抽添、非在外也。自下田入上田、名曰肘後飛金晶、又曰起河車而走龍虎、又曰還精補腦。

とある。

(3) 《悟眞外篇》《氣爲用說四》に、次のようにある。

元氣之生、周流平身、而獨於腎府採而用之者、何也。

夫腎府路徑、直達氣穴黃庭者、一也。

腎爲精府、精至直引精華而用之、二也。

周流於他處、則難用、至精府而可識、三也。

心氣透腎、意下則直至、採之者易爲力、四也。

有此四者、故採眞陽於腎府耳。

◎ 經云「身下出火、身上出水。」水火爲藥。⁽¹⁾ 訣曰、蘆芽穿膝、上下河車、安爐竈、是紫河車、搬精補腦之上車。⁽²⁾ 進火時水暖、進水時火涼。水火雙行者、是溫溫鉛鼎。⁽⁴⁾ 鼎中入氣起、⁽⁵⁾ 休交、上隨車、火時散入百脉、皮膚滋潤、身體光澤。此是修養之法。⁽¹⁾〔二六裏〕

經ニ云ク「身下火ヲ出シ、身上水ヲ出ス。」水火ハ藥トナス。⁽¹⁾ 訣ニ曰ク、蘆芽穿膝、上下ノ河車、爐竈ヲ安シズ、コレ紫河車、搬精補腦ノ上車ナリ。⁽²⁾ 火ヲ進ムル時水暖カク、水ヲ進ムル時火涼シ。⁽³⁾ 水火雙行スルハ、溫溫タル鉛鼎ナリ。⁽⁴⁾ 鼎中ニ氣ヲ入レ起コリ、交ワルヲヤメ、上リテ車ニ隨イ、火時ニ百脉ニ散入シ、皮膚滋潤、身體光澤ナリ。⁽⁵⁾ コレ、修養ノ法ナリ。

(1) 《靈寶畢法》上卷《燒煉丹藥第四》に「眞訣曰、離卦龍虎交媾、名曰採藥。」とある。

(2) 《傳道集》《論河車第一二》に詳細な説明がある。小・大・紫の三河車について、「此三車之名、分上中下三

『重陽眞人金關玉鎖訣』について

成。三成者、言其功之驗證。非比釋教之三乘。而曰羊車鹿車大牛車也」とある。また、丘長春《大丹直指》卷上〔四表〕に「腎氣中暗藏肺氣、過尾閭曰河車」とあり、《悟真篇正義》卷下「河車不敢暫留停」について、次のように注解されている。

河車者、北方正氣、號曰河車。……凡車皆轉於陸、而河車乃轉於水。丹道中用之以運載水火、故有比喻名也。又有小河車大河車紫河車之名目、然總無非一氣而已矣。

(3) ⑤(2) 参照。

(4) 《呂祖全書》七七〇頁《沁園春第三首》に「溫溫鉛鼎、光透簾幃」の句があり、《金丹大成集》《解註呂公沁園春》に、「鉛鼎、即造化鉛鼎也。溫溫、謂火力不使虧欠。必也溫養而成丹」とある。呂詞の後半は「皮膚滋潤、身體光澤」に相當するものであらう。

(5) 以下、句に誤りあらん。

④ 夫水火、是君火・臣火・民火。⁽¹⁾三火者、爲眞味也。⁽²⁾心性意、是也。今人未了達三般者、第一味不明、第二味不悟、第三味智不成道矣。若人達三般者、三昧六通也。⁽³⁾〔九裏〕

ソレ水火ハ、君火、臣火、民火ナリ。⁽¹⁾三火ハ、眞味ヲナスナリ。心性意コレナリ。今人ノ、未ダ三般ニ了達セザル者、第一味、不明ナリ、第二味、不悟ナリ、第三味、智道ヲ成サザルナリ。モシ人三般ニ達スレバ、三昧六通ナリ。⁽³⁾

(1) 句に誤りあらん。

(2) 《傳道集》《論水火第七》に火の功について論述あり。また、「凡身中以火言者、君火臣火民火而已。三火以

元陽爲本、而生眞氣」とある。丘長春《大丹直指》卷上・三裏に「心氣爲眞火、爲上昧火。膀胱氣曰民火、爲中昧火。腎氣爲臣火、爲下昧火」、卷上・八裏に「心氣曰君火、爲上昧。膀胱氣曰民火、爲下昧。腎氣爲臣火、爲中昧」とある。

(3) 《無上大乘要訣妙經》一〇表〔藏三一宿中〕に「得道位眞人、三三通六神」とあるが、元來、佛教の言葉か。劉宋・晁良耶舍譯《佛說觀無量壽經》〔正一二、三四五中〕に「聞衆音聲讚嘆四諦、應時卽得阿羅漢道。三三通六通具八解脫」とあり、阿羅漢のそなえた徳をいう。

㊦ 曰「何者爲刀圭」⁽¹⁾。訣曰「刀圭者、一也。有水有氣、能生萬物也。炁爲圭、爲雲。水爲雨」⁽²⁾。又曰「出炁爲刀。入炁爲圭。行功爲萬有驗者、爲刀圭。是返老還童也。」〔二六表裏〕

曰ク「何者ゾ刀圭トナス」⁽¹⁾。訣シテ曰ク「刀圭トハ、一ナリ。水アリ氣アリ、能ク萬物ヲ生ズルナリ。炁ヲ圭ト爲シ雲トナス。水ヲ雨トナス」⁽²⁾。マタ曰ク「出炁ヲ刀トナシ、入炁ヲ圭トナス。功ヲ行イテ萬驗アリトナスモノ、刀圭トナス。コレ老ヲ返ジテ童ニ還スナリ。」

(1) 刀圭について《悟眞篇正義》卷中「鼓琴招鳳飲刀圭」を注解して、

刀圭者、醫書中、凡用藥少許、謂之一刀圭。以刀頭圭角、爲些小之藥也。言鼓動其和氣、使之運行以取汞、如飲服延年之藥物。故謂之鼓琴招鳳飲刀圭也。

とある。また、圭の意味について、丘長春《大丹直指》卷下〔一一表〕は「頂爲戊土、臍爲己土。二土爲圭字。所以呂仙翁刀圭也」と解する。使用例に、

《重陽全真集》〔卷二・一五表〕自從收得水中金、使用刀圭剖盡陰。

《重陽教化集》〔卷二・一表〕應用刀圭節要開劈。三田會靈明、結作般般、光輝是勤。

などがある。

- (2) 水字下、爲刀の二字を脱するか。雲雨の對應については《傳道集》へ論内觀第一六に「呂曰、『所謂存想内觀、大畧如何。』鍾曰、『如陽升也、多想爲男・爲龍……爲雲……如陰降也、多想爲女・爲虎……爲雨……』」とある。要するに刀圭は眞水眞火の交わりであらう。

④ 問曰「既刀圭⁽¹⁾。何者言爲一粒刀圭。何者自飲刀圭。何者爲鐵離刀圭。」訣曰「三刀圭者、爲寶也。是精氣血也。」訣曰「一粒刀圭者、津液。自飲刀圭者、咽津服炁。鐵離刀圭者、是眞炁。」〔一〇表〕

問イテ曰ク「既ニ刀圭⁽¹⁾。何者ゾ一粒ノ刀圭トナスト言ウヤ。何者ゾ、ミズカラ刀圭ヲ飲ムトハ。何者ゾ鐵離ノ刀圭トナスヤ。」訣シテ曰ク「三刀圭ハ、寶タルナリ。コレ、精氣血ナリ。」訣シテ曰ク「一粒ノ刀圭トハ、津液。ミズカラ刀圭ヲ飲ムトハ、津ヲ咽ミ炁ヲ服ス。鐵離ノ刀圭トハ、眞炁ナリ。」

(1) 既字下、問字を脱するか。

③ 三寶搬運論

- ① 問曰「若有人收定三寶⁽¹⁾、搬運歸寄何處。」先用蘆芽穿膝之法。烹氣衝寶爐骨⁽³⁾、運氣直至湧泉⁽⁴⁾、補於二足。然後、

七返還丹之法。⁽⁵⁾如氣滯定腰脚時、便行鐵車黑牛功。⁽⁶⁾然後、開宰門。如得元炁實肚者、先行肘後飛金晶之法。⁽⁷⁾如不用行此功者、不行穿膝之法、不行七返三島之法。⁽⁸⁾便行肘後搬精補腦之法。⁽⁹⁾望長生不老。今人行功、顧上不顧下、如小兒建塔、下不堅牢也。如何、是中炁實要堅牢也。〔七表〕

問イテ曰ク「モシアル人三寶ヲ收定スレバ、搬運シテ何處ニ歸寄スルヤ。」マズ蘆芽穿膝ノ法ヲ用イテ氣ヲ烹テ寶爐ノ骨ニ衝テ、氣ヲ運ビテ直チニ湧泉ニ至リ、二足ヲ補ウ。シカル後、七返還丹ノ法。⁽⁵⁾氣ノ、腰脚ニ滯定スル如キ時ハ、スナワチ鐵車黑牛ノ功ヲ行ウ。シカル後、宰門ヲ開ク。元炁ノ、肚ヲ實タスヲ得ル如キ者ハ、マズ肘後金晶ヲ飛バスノ法ヲ行エ。コノ功ヲ行ウヲ用イザル如キ者ハ、穿膝ノ法ヲ行ワズ、七返三島ノ法ヲ行ワズ。スナワチ肘後精ヲ搬^コンデ腦ヲ補ウノ法ヲ行イ、長生不老ヲ望メ。今人ノ功ヲ行ウハ、上ヲ顧テ下ヲ顧ズ、小兒ノ塔ヲ建ツル如ク、下堅牢ナラザルナリ。如何ントナレバ、コノ中炁實ニ堅牢ヲ要スレバナリ。

(1) 定三寶については三(2)③④参照。三寶は、精氣血をいう。三(2)①⑥参照。

(2) 《金丹大成集》《金丹問答》に、次のようにある。

問曰何謂搬運。

答曰搬金精於肘後、運玉液於泥丸、下手工夫。口訣存焉。

(3) 骨字は衍か。

(4) 《紫清指玄集》《冬至小參文》〔宋・白玉蟾撰述。精・七〕に「身中一寶、隱在丹田……上至泥丸、下及湧泉」とある。

(5) 《傳道集》《論還丹第一三》に七返還丹の説明がある。《金丹大成集》《解註呂公沁園春》の「七返還丹」『重陽真人金關玉鎖訣』について

の注に、

火生數二、成數七。返者、自下而返上。還者、自上而還下。或曰、木三金四、合成七數、故曰七返。其說亦妙。蓋金木乃水火之父母、五行之宗祖、還丹之根基也。

とある。前説が勝れるか。

(6) 三(1)④e (12)に「鐵黑牛搬車」、「黑者、是下氣也」とある。

(7) 肘後は、葛洪の《肘後備急方》「藏一〇二三—一五陞」という書物の名前からもわかるように、元來醫家の用語である。《靈寶畢法》中卷《肘後飛金晶第五》、兵長春《大丹直指》卷上二表以下など参照。また、同卷上二〇裏に「一撞三關入腦曰肘後飛金精」とある。

(8) 《金丹大成集》《解註呂公沁園春》「蓬萊路」の注解に「蓬萊三島、乃海上仙山也。在人一身、亦有蓬萊三島。頂曰上島、心曰中島、腎曰下島」とある。

(9) 《傳道集》《論抽添第一二》に「自下田入上田、名曰肘後飛金晶……又曰還精補腦、而長生不死」とある。従つて、ここの文脈に誤りがあるか。《靈寶畢法》中卷《金液還丹第七》には、次のようにある。

直解曰、金液、肺液也。含龍虎而入下田、則大藥將成。謂之金液。肘後抽之入腦、自上復降下田、則曰還丹。又復前升、遍滿四體、自下而上、則曰煉形、亦謂之煉形成氣。……

所謂金液者、腎氣合心氣而不上升薰蒸於肺。肺爲華蓋。下罩二氣。卽日而取肺液、在下田自尾閭穴升上、乃曰飛金晶入腦中、以補泥丸之宮。

⑥ 又於坎宮⁽¹⁾、使用羊鹿大牛三車⁽²⁾、搬從荊山運寶⁽³⁾。……訣曰、善清靜名曰下元寶成⁽⁴⁾、如日月相似⁽⁵⁾。使用三車搬運上崑崙頂⁽⁷⁾。……第一⁽⁸⁾、神性是大牛之車、須索動青牛拽車、車中載寶。是鹿車。第二、行白牛拽車、車中載寶。第三、暖氣行火、是羊車。赤牛拽車、車中載寶。〔七表—八表〕

マタ、坎宮ニオイテ、スナワチ羊、鹿、大牛ノ三車ヲ用イテ、荊山ヨリ搬ビ寶ヲ運ブ⁽³⁾。……訣ニ曰ク、善ク清靜ナルヲ名ツケテ下元ノ寶成リ⁽⁴⁾、日月ト相似ルガ如シトイウ⁽⁵⁾。スナワチ三車ヲ用イテ搬運シ崑崙頂ニ上ル⁽⁷⁾。……第一⁽⁸⁾、神性、大牛ノ車ナリ、スベカラク青牛ヲ動カシテ車ヲ拽クヲ索ムベシ、車中寶ヲ載ス。鹿車ナリ。第二、白牛車ヲ拽クヲ行ウ、車中寶ヲ載ス。第三、暖氣、火ヲ行ル、コレ羊車。赤牛車ヲ拽ク、車中寶ヲ載ス。

(1) 心の離宮に對して腎をいうのであろう。《傳道集》《論鉛汞第一〇》に「呂曰、内藥不出龍虎也。虎生於坎宮。氣中之水、是也。龍出於離宮、水中之氣、是也」とある。

(2) 三(1)②③(2) 参照。

(3) 搬字、運上にあるべきか。

(4) 《傳道集》《論還丹第一三》に「小還丹者、本自下元。下元者、五臟之主、三田之本」とある。「下元寶成」は、前項(9)の《靈寶畢法》の文中、「大藥將成」の段階であらう。また、次の《傳道集》《論河車第二二》の、小河車の段階であり、崑崙頂に運ぶのが大河車の段階であらう。

默契顛倒之術、龍虎相交而變黃芽者、小河車也。

肘後飛金鼎、還晶入泥丸、抽鉛添汞、而成大藥者、大河車也。

(5) 《金丹大成集》《金丹問答》に「問採日精月華。答曰、非外之日月。採心中真液、腎中真氣也」とある。

『重陽真人金關玉鎖訣』について

(6) 《傳道集》《論河車第二》に「蓋人身之中、陽少陰多、言水之處甚衆。車則取意於搬運、河乃主象於多陰」とある。

(7) 《悟眞篇正義》卷下「運入崑崙峯頂」の注解に、次のようにある。

崑崙峯者、乃泥丸頂也。言鉛汞交會之後、當用河車裝載藥物、不可暫爲停留、徑運入崑崙之頭頂、而後、降上重樓、歸於土釜之中、以凝結其丹胎也。

(8) 以下、文に錯誤多し。例えば、「是鹿車」は「第二行」の次にくるべきものである。「神性」「行」「暖氣行火」にはそれぞれ脱落があると思われる。讀み下しは全く暫定的なものである。

③ 三車行時、初離荆山尾閭中、入地軸、過天關、過下雙關、腎俞二穴、是。腰腿、入曹溪地、夾脊上雙關、夾脊、是也。雙射上苑巖、分水嶺、二名、天臺嶺、三名。女子運寶、前安乳香、頻進眞火。如行功一年、令婦人如童男。意想、鉛汞二珠、射蓬萊、腦後開、天門自開、透紅霞、眞炁入髓海、自暖。令人頭白再黑。名曰肘後飛金晶之法。〔八表〕三車ノ行ク時、初メテ荆山、尾閭ノ中ヲ離レ、地軸ニ入り、天關ヲ過ギ、下ノ雙關ヲ過ギ、腎俞ノ二穴是ナリ、腰腿、曹溪ノ地、夾脊上ノ雙關ニ入り、夾脊是ナリ、上苑巖ヲ雙射シ、分水嶺、二名、天臺嶺、三名。女子ノ運寶ハ、前ニ乳香ヲ安ンジ、頻リニ眞火ヲ進メル。モシコノ功ヲ行イテ一年ナラバ、婦人ヲシテ童男ノ如クナラシム。意想セヨ、鉛汞ノ二珠、蓬萊ヲ射リ、腦後開キ、天門オノズカラ開キ、紅霞ヲ透ス。眞炁髓海ニ入り、オノズカラ暖カナリ。人頭ノ白ヲシテ再ビ黑ナラシム。名ヅケテ肘後金晶ヲ飛バスノ法ト曰ウ。

(1) 前項⑥に直接つづいた敘述であるが、⑥同様に錯誤が多い。

(2) 《金丹大成集》《金丹問答》に

問背後三關

答曰、腦後曰玉枕關、夾脊曰轆轤關、水火之際曰尾閭關

とある。即ち、背後の三關の下關であろう。なお、(19) 参照。

(3) 《性命圭旨》《反照圖》には、尾閭穴、曹溪路、地軸とも、すべて同じ部位(地)にある。

(4) 《金丹大成集》《金丹問答》に「頭爲天關、足爲地關、手爲人關」とある。また、かかる氣のめぐりについて、丘長春《大丹直指》卷上九裏——〇表に、「其氣自然從尾閭穴、入夾脊三關、直上轆轤穴天關在腦後、入崑崙、復下丹田、周流運轉不絶」とある。なお、本文の天關は地關の誤りか。

(5) 腎俞二穴は、下雙關を説明した挿入句であろう。

(6) 腰腿は過下雙關に續くものであらう。

(7) (3) 参照。《漁莊錄》《兩儀章》に「夾脊雙關崑崙過、此呂祖之口訣也。今人皆以夾脊雙關崑崙者、是曹溪任督之徑路也。殊不知曹溪任督、與夾脊雙關相爲表裏也」とある。

(8) 夾脊の二字、衍か。(2)、(4)、(7) 参照。《悟眞外篇》《金丹四百字序》に「夾脊如車輪」とある。

(9) 夾脊是也は、上雙關を説明する挿入句であらう。

(10) 雙字は衍か。上苑は普通は天子の庭園のことであらうが、この上苑巖は、分水嶺・天臺嶺と同じものである。従つて、二名・三名は分水嶺・天臺嶺の上にくるべきものか。《黃庭內景經》《天中章第六》「天中之岳精謹修、雲宅……」の務成子注に「天中之岳、謂鼻也。一名天臺」とある。

(11) この行、「如童男」まで錯入か。

(12) 乳香は、普通は香木であるが、ここは未詳。陳撝寧註解《孫不二女丹詩註》（一九六四年、臺灣・眞善美出版社）に「縛虎歸眞穴、牽龍漸益丹」の注として「即上陽子陳致虛所云、女子修仙必先積氣於乳房也」（二一裏）とある。

(13) 童男は童女の誤りか。

(14) 丘長春《大丹直指》卷上一三裏に、「當抽添（鉛の誤り）添汞」の割注として「出氣爲鉛、腎中氣也。入氣爲汞、心中氣也」とある。

(15) (a) (8) 参照。

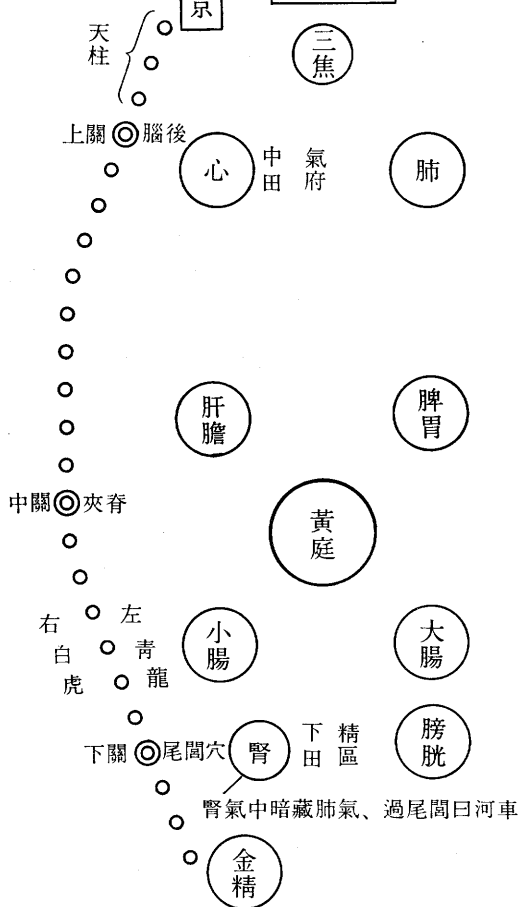
(16) (2) 参照。

(17) 丘長春《大丹直指》卷上六裏に「開天門」を割注して「鼻也。是爲玄牝之門」とある。また、三(1)④⑤にも「鼻爲天門」とある。なお、《悟眞外篇》《火候圖論二》に「自尾閭徐徐升上、而至泥丸。頂爲天門、爲正午之地」とある。

(18) 《靈寶畢法》中卷《肘後飛金晶第五》に「漸次開入頂、以補泥丸髓海」、《性命圭旨》《內照圖》に「腦者、髓之海。諸髓皆屬之。故上至泥丸、下至尾軀、俱腎主之」とある。

(19) (a) (7) 参照。丘長春《大丹直指》卷上四表—五裏、一二表の《三田返復肘後飛金晶圖》、《三田返復金液還丹圖》、《神水交合三田既濟圖》を中心に、《靈寶畢法》中卷《肘後飛金晶第五》、《金液還丹第七》を参考として、以上の論を圖示すれば、次のようになる。氣の運轉の段階については、《大丹直指》に「尾閭下關日金

神舍
上田
髓海
泥丸



訣ニ曰ク、荊山ノ近ク、一人アリ、姓ハ卞、名ハ和。アル一日、荊山ニ柴ヲ打ル。却ッテ一鳳凰ノ一塊ノ石上ニ落

チルヲ見ル。卞和スナワチ石中ニ寶アルヲ知リ、將チ來リテ帝ニ獻ズ。帝、大イニ怒リテ卞和ノ雙足ヲ刖ル。訣ニ曰ク、卞和トハ識ナリ。意、頑石ナリ。鳳凰トハ眞氣コノ身ヲ成スナリ。玉トハ、骨中ノ精髓。刖トハ兩足、穿膝ノ法ヲ行ワザルナリ。

(1) 《韓非子》《和氏篇》にもとづく。

(2) 《靈寶畢法》中卷《金液還丹第七》に「所謂玉液者、……是液本自腎中來而生於心、亦比土中生石、石中生玉之說也」とある。

④ 行 功 論

(a) 夫行功之時、子午起跏趺坐、搓手。如眞氣煎體、過天橋、過額顚、是也、只教上腮下腮上用意、分眞氣兩下流轉太陽元中、落於腮上流牙齒、從左口角右口角取液。又爲玄珠甘露。用赤龍攪得勻停、漱爲雪花、白有甘味也。口是八色瑠璃渠。一中八味水。二水中能生八識。口含藏眞氣、眞氣中分八卦……。訣曰、咽津爲陰、隨後行氣乃爲陽。須索陰陽水火停、分二清津、分三兩咽、常留二停、恐樹枯竭。又云、惜水流不得江河斷絕。〔八表—九表〕

ソレ功ヲ行ウノ時、子午ニ起跏趺坐シ、手ヲ搓ム。モシ眞氣體ヲ煎シ、天橋ヲ過ギレバ、額顚ヲ過グ、是ナリ、タダ上腮下腮上ニ意ヲ用イシメ、眞氣ヲ兩下流ニ分チテ太陽元中ニ轉ジ、腮上ニ落トシテ牙齒ニ流シ、左ノ口角右ノ口角ヨリ液ヲ取ル。マタ玄珠ノ甘露トナス。赤龍ヲ用ツテ攪シテ勻シク停メルヲ得、漱シテ雪花トナス。白ニ甘味アルナリ。口ハ八色ノ瑠璃渠ナリ。一中、八味ノ水。二ニ、水中ヨク八識ヲ生ズ。口ハ眞氣ヲ含藏シ、眞氣中八卦ヲ分カ

ツ……。訣ニ曰ク、咽津ヲ陰トナシ、隨後ニ氣ヲ行ルヲ陽トナス。スベカラク陰陽水火ノ停マルヲ索ムベシ。二清津ニ分カチ、三ニ分カチテ兩咽シ、常ニニヲ留メ、停マル。樹ノ枯竭スルヲ恐ル。マタ云ウ、水流ヲ惜ミテ、江河ヲ斷絶スルヲ得ズ。

- (1) 《傳道集》《論日月第四》に「天地之陰陽升降、一年一交合。日月之精華往來、一月一交合。人之氣液、一晝夜一交合」とあり、子午はその交合の微妙な時であらう。《金丹大成集》《金丹問答》に「子時象冬至、陰極而陽生。午時象夏至、陽極而陰生」とあり、《大丹直指》卷上六表裏に「採藥之法、人多以子時腎氣發生、午時心液降下之際、行功。……舉腎氣則是子、降心液則是午、不以時刻皆可」ともいう。
- (2) 丘長春《大丹直指》卷上八表に「二物（龍虎）混合爲一、當用意便爲子時也。自然凝結、形如黍米之大。每日得一粒、……號曰玄珠」とある。

- (3) 《傳道集》《論內觀第一六》「若炎炎火中、見一黑虎金上升、滔滔浪裏、一赤龍木下降、……」とある。然らば、肝と心の氣か。

- (4) 《傳道集》《論煉形第二四》に「口生靈液、而液爲白雪」とある。また、《悟真篇正義》卷上「黃芽白雪不難尋」の注解に、次のようにある。

黃芽白雪者、卽鉛汞之二物也。復命篇曰、白雪乃是神室水、黃芽便是氣樞花。翠虛篇曰、黃芽本是乾坤氣、神水根基與汞連。皆此之義也。

- (5) 佛教の用語に八味や八功德水などがあるが、元來はそれをとったものであろうか。《稱讚淨土佛攝受經》〔唐・玄奘譯。正一二、三四八下〕に、

又舍利子、極樂世界淨佛土中、處處皆有七妙寶池。八功德水彌滿其中。何等名爲八功德水。一者澄淨、二

者清冷、三者甘美、四者輕軟、五者潤澤、六者安和、七者飲時除飢渴等無量過患、八者飲已定能長養諸根
四大、增益種種殊勝善根、多福衆生常樂受用、……

とあり、東晋・法顯譯《佛說大般泥洹經》卷二《受持品第七》〔正一二、八六八上〕に、

八種味者、常住法、寂滅法、不老、不死、清淨、虛通、不動、快樂、是八種味、名大般泥洹

とある。また、宋・道誠集《釋氏要覽》上〔正五四、二七四中〕は、甘・辛・鹹・苦・酸・淡・澀・不了の八種を八味としている。なお、三(1)②④(5) 参照。

(6) 八識は佛教の八識(耳目鼻舌身意及び末那識、阿賴耶識)をとったものであらう。《性命圭旨》《八識歸元圖》に「八識者、皆屬無明色身已上事」とある。

(7) 以下、文意把え難し。讀み下しは暫定的である。兩は度の誤りか。(c)参照。

(b) 訣曰、血海⁽¹⁾命門⁽²⁾氣定、無開閉戶精定、不思外境神定。精血⁽³⁾散者、性命也。一意者、爲眞主人也⁽⁴⁾。齒⁽⁵⁾是爲玄關。丹田者、爲下玄關⁽⁶⁾。提金精上玄者、爲金關。緊叩齒者、爲玉鎖⁽⁷⁾。六根不動者、是六度、號都關。下納氣爲勒陽關。上臆爲頂陽關。鼻爲天門。夾脊爲雙關⁽⁹⁾。行功之時、一齊開鎖。神不動者、意不亂也。意者、恍惚也。此是清靜之法也。

〔一二裏——一二表〕

訣ニ曰ク、血海⁽¹⁾命門⁽²⁾、氣定マル。戸ヲ開閉スルナシ、精定マル。外境ヲ思フズ、神定マル。精血、散ズルハ性命ナリ。一意トハ眞ノ主人タルナリ。齒ヲ玄關ノ閉トナス。丹田トハ下ノ玄關ヲナス。金精ヲ上玄ニ提スルヲ金關トナス。齒ヲ緊叩スルヲ玉鎖トナス。六根不動ハ、六度ナリ、號シテ都^ス關トス。下ノ納氣ヲ勒陽關トナス。上臆ヲ頂陽關ト

ナス。鼻ヲ天門トナス。夾脊ヲ雙關トナス。⁽⁹⁾功ヲ行ウノ時、一齊ニ開鎖ス。神不動ナルハ、意不亂ナリ。意トハ恍惚ナリ。コレ、清靜ノ法ナリ。

(1) 《傳道集》《論水火第七》に「心爲血海」とある。

(2) 《養生内功祕訣》《道語辭解》に「命門、陽關。就是精道」とある。

(3) 句に誤りあるか。

(4) 《金丹大成集》《金丹問答》に「問曰、馬芽、眞主人、神符、白雪、何也。答曰、皆鉛汞之總名也」とある。

(5) 閉字は玄關の上にあるべきか。

(6) 丘長春《大丹直指》卷下一四裏に「玄關乃在臍裏、一寸三分」とある。

(7) 提金精上玄とは、前節①(19)の肘後飛金晶のことであろう。即ち、金精が下關から上關を通じて泥丸・髓海の上田に至ることであり、關はそのような段階を總稱したものである。《金丹大成集》《西江月第五首》に「嶺頭駕動河車、搬歸頂上結三花、牢閉玉關金鎖」とある。關も鎖も同じいみである。例文としては、

《分梨十化集》《卷上・七表》《神光燦》金闕叩戶、玉鎖扃門、閉裏不做修持。……

《同》《卷上・五裏》《恣逍遙》若要修行、須當子細把金關玉門牢閉、上下冲和、位交漑濟得來後惺惺……

《重陽教化集》《卷二、一〇表》《聞丹陽欲上崑崙山以詩寄之》の丹陽次韻。……要登雲路開瓊路、牢閉金關

闌玉關、烹練大丹丹不漏、自然得見内容顔

などがある。

(8) 《靈寶華法》中卷《肘後飛金晶第五》には「眞解曰、……乾卦勒陽關、中田返下田也。道要曰、……勒陽關

『重陽眞人金關玉鎖訣』について

而聚氣」とあり、陽關ヲ勒スル（抑エル）と讀めるが、頂陽關と對にして一應勒陽關と讀んでおく。

(9) 《重陽教化集》卷一・二〇裏に《贈丹陽》の《丹陽繼韻》として

能可移山志不移 蓋因玄妙頗通知 雙關未曉須求告 除了師父更問誰
とある。

◎ 訣曰、長教龍盤金鼎、虎遶丹田⁽²⁾。震卦起雷、巽卦起風⁽³⁾。行功時、漱津一大口、分三度咽⁽⁴⁾。按氣下行三徧。自然有龍吟虎嘯之聲⁽⁵⁾。亦能除腹中萬病。耳聽之如雷槌畫鼓。上者爲昇、下者爲降⁽⁶⁾。頌曰、眞空妙理無人知、曲江端坐看鳥飛⁽⁷⁾、震地雷聲驚鬼魅、正是陰陽造化時、子後午前加減用、水火烹煎龍虎隨、金公帶酒黃婆醉、揅定王公問是誰。〔一六裏一七表〕

訣ニ曰ク、長ク龍ヲシテ金鼎ヲ盤⁽¹⁾ラシメ、虎ヲシテ丹田ヲ遶⁽²⁾ラシム。震ノ卦ハ雷ヲ起シ、巽ノ卦ハ風ヲ起ス⁽³⁾。行功ノ時、津ヲ漱スルコト一大口、三度ニ分ケテ咽⁽⁴⁾ス。氣ヲ按^{オス}エテ下行スルコト三徧。自然ニ龍ノ吟ジ虎ノ嘯⁽⁵⁾ブク聲アリ、マタ能ク腹中ノ萬病ヲ除ク。耳コレヲ聽クニ雷ノ畫鼓ヲ槌^チツガ如シ。上ルモノヲ昇トシ、下ルモノヲ降トス⁽⁶⁾。頌シテ曰ク、眞空ノ妙理人知ルコトナシ、曲江ニ端坐シテ鳥ノ飛⁽⁷⁾ブヲ看ル。地ヲ震^スワス雷ノ聲鬼魅ヲ驚カシ、正ニ是レ陰陽造化ノ時。子後午前加減ヲ用イ、水火烹煎シテ龍虎隨ウ。金公酒ヲ帶ビ黃婆醉イ、王公ヲ揅定シテ問ウ是レ誰ゾ。

(1) 長字、衍か。

(2) 三(1)②a(12) 參照。

(3) 《周易》震卦の象に「洊^{シヤリニ}雷震」、巽卦の象に「隨風巽」とある。《金丹大成集》《解註崔公入藥鏡》の「起

巽風、運坤火」の注に「息者、風也。火不能自炎、須假風以吹之」とある。ただし、龍虎と關連させると、必ずしも震巽と一致しない時があるようであり、《傳道集》《論龍虎第八》に「龍、陽物也。升飛在天。吟而雲起。……在卦爲震。……虎、陰物也。奔走於地。嘯而風生。……在卦爲兌」とある。

(4) 《靈寶畢法》上卷《聚散水火第二》に「眞解曰……咽心氣搐（①收）外腎、以合腎氣、使三火聚而爲一、以聚元氣……」とあるが、これが咽三度の理由であらうか。

(5) 《金丹大成集》《金丹問答》に「呼則龍吟雲起、吸則虎嘯風生。呼吸風雲、凝成金液」とある。

(6) 《大丹直指》卷上三表に「心氣下降、腎氣上升」とある。

(7) 《金丹大成集》《解註呂公沁園春》の「曲江上、見月華瑩淨、有個鳥飛」の注に「人之小腸、九盤十二曲、謂之曲江也。……有個鳥飛、乃陰中含陽也」とある。

(8) 《大丹直指》卷上六表に「肺之下氣曰金公」とある。また、《悟眞篇正義》卷中「長男乍飲西方酒」の注に「西方酒者、喻兌金之液也」とある。

《靈寶畢法》上卷《燒煉丹藥第四》に「黃婆是脾中眞液。和合氣水而入黃庭」とある。

④ 訣曰、行功時、坐如泰山、立如寶塔。牢鎮四門、緊叩玄關、漱津一口。爲猛三咽、下接炁、過離隔、活作三度。自然龍虎之炁、復如。行住坐臥、禁口閉目、耳不聽聲、眼視內景。一日正觀丹田、意中想見。隨呼炁下降、隨吸炁上昇。不過離隔、不教注面目上。六炁各到中元相見。清炁右行、濁氣左行。各轉九遭、炁上下、不能出左右。結成醞竈、號龍盤虎遶氣、自然和會。又嬰兒姤女爲夫婦之法。炁聚於脾上、安爐、號黃婆匹配之法。⁽¹⁰⁾又名天地交泰之法。又名坎

離交媾。是體交、神不交之法。神不交者、是清靜之法。千徧不搖不動之法。〔一七裏—一八表〕

訣ニ曰ク、行功ノ時、坐スレバ泰山ノ如ク、立テバ寶塔ノ如シ。四門ヲ牢鎖シ⁽¹⁾、玄關ヲ緊叩シ⁽²⁾、津ヲ漱スルコト一口。猛シク三咽ヲナシ、下炁ニ接シ、離隔ヲ過ギ、活作スルコト三度。自然、龍虎ノ炁、復如ス。行住坐臥、口ヲ禁ジ目ヲ閉ジ、耳聲ヲ聽カズ、眼内景ヲ視ル⁽⁴⁾。一日、丹田ヲ正觀シ、意中想見ス。呼炁ニ隨ッテ下降シ、吸炁ニ隨ッテ上昇ス⁽⁵⁾。離隔ヲ過ギズ、面目上ニ注ガシメズ。六炁ハオノオノ中元ニ到リテ相見ル。清炁ハ右行シ、濁氣ハ左行ス。オノオノ轉ズルコト九遭⁽⁶⁾、炁ハ上下シ、左右ニ出ル能ワズ。爐竈ヲ結成シ、龍盤虎遶ノ氣自然和會スト號ス⁽⁸⁾。マタ、嬰兒姪女、夫婦トナルノ法ナリ。炁ヲ脾上ニ聚メ爐ヲ安ンズ、黃婆匹配ノ法ト號ス⁽¹⁰⁾。マタ天地交泰ノ法ト名ヅク。マタ、坎離交媾ト名ヅク。コレ、體交ワリテ、神交ラザルノ法ナリ。神交ラズトハ、清靜ノ法ナリ。千徧、不搖不動ノ法ナリ。

(1) 眼耳鼻口のこと。四參照。

(2) ①に「齒是爲玄關閉」「緊叩齒者爲玉鎖」とあるが、然らば玄關は齒のことであらう。

(3) 《丹陽語錄》六表に「人之膈已上爲天、膈已下爲地」とあるが、膈は膈のことか。

(4) 《養生內功祕訣》《道語辭解》に「內景。依着自覺而知的煉丹工程的發相、陽生的時候、自覺臍下溫暖、就是一種內景」とあるが、要するに體内の氣の運動に意識を集中することであらう。《大丹直指》卷上六裏に「但初行之法、閉目內視中宮、絕慮忘思冥心……」とある。

(5) 《金丹大成集》《金丹問答》に「呼出心與肺、吸入腎與肝。呼則接天根、吸則接地根」とある。

(6) 《傳道集》《論抽添第一》に「是以天地陰陽升降、而變六氣、乃抽添之驗也」とある。太陰・厥陰・少

陽・陽明・少陰・太陽を人身にあてはめたものか。

(7) 《悟眞篇正義》中卷「用將須分左右軍」の注に、

左右者、陰陽之道路。左屬陽爲主、右屬陰爲賓。而運火之法、當分左右二道、以任其金火之行也。
とあるが、これは本文の左右の考えと逆のようである。

(8) 《大丹直指》卷上六表に

龍是心液上正陽之氣。制之不上出。若見腎氣、自然相合。

虎是腎氣中眞一之水。制之不下走。若見心液、自然相交。

龍虎交媾、得一粒如黍米形。此一法號曰龍虎交媾。

とある。これはまた、後出の坎離交媾であろう。以下の諸法、内容的には同じである。

(9) 《金丹大成集》《金丹問答》に「嬰兒在腎、姤女在心」とある。

(10) 前項(8)参照。

(11) 《大丹直指》卷下一〇裏一一表に、

性者、天也。常潛於頂。命者、地也。常潛於臍。……

頂中之性者、鉛也、虎也、水也、金也、日也、意也、坎也、坤也、戊也、姤女也、玉關也。

臍中之命者、汞也、龍也、火也、根也、月也、魄也、離也、乾也、己也、嬰兒也、金臺也。

とある。

⑥ 《九仙經》⁽¹⁾云「道者一也。人得一者、萬事必成。」行功時、神氣轉、炁逐意。行運時、前趕前衝、爲陰左將陰神⁽²⁾、六甲驅轉⁽³⁾、六相八識⁽⁴⁾、匡一眞靈⁽⁵⁾、內遊九宮⁽⁵⁾、看翫十國長生降臺⁽⁶⁾、使嬰兒姪女⁽⁶⁾、丹田安爐竈⁽⁷⁾、進火燒藥⁽⁷⁾。意想、見爐紅竈熱、丹藥方成。意想、青龍在左、白虎在右、朱雀在前、玄武在後⁽⁸⁾。四坐大神、各手執長鎗闊劍。看定藥爐、自服妙藥。若人累行此功、永得長生、令邪氣自散、眞氣自生。口若飲荆山玉泉⁽⁹⁾、口中自然香甜也。二下穴通達⁽¹⁰⁾、腎堂隨呼吸取之、寶氣入口、嗽三十六遍、爲雪花。咽入丹田、爲雪也⁽¹¹⁾。隨後、便上合下閉、乾坤相合⁽¹²⁾、眞氣滿足、脾暖者、萬病消除。似竈中燒瓦、時到自然成。如雞抱卵、婦人懷胎、不計時候。但覺身中疼痛者、便是鐵黑牛搬車也⁽¹³⁾。是眞一氣、眞一性。黑者、是下氣也。痛氣大便出、腫氣小便出。又有降天關地軸法。望項陽關⁽¹⁴⁾、泥丸宮⁽¹⁵⁾、鼻中長引眞氣、入口大呵作六遍。天關地軸如死不動。每日行宮者、常調和陰陽。二〇裏——二一裏

《九仙經》⁽¹⁾ニ云ウ「道トハ一ナリ。人ニシテ一ヲ得ル者、萬事必ズ成ル。」行功ノ時、神氣轉ジ、炁意ヲ逐ウ。行運スル時、前ニ趕リ、前ニ衝キ、陰左將・陰神トナリ、六甲シテ驅轉シ、六相八識⁽⁴⁾、一ノ眞靈ニ匡チ、内ニ九宮ニ遊ビ⁽⁵⁾、十國ノ長生降臺ヲ看翫シ、嬰兒姪女ヲ使イ、丹田ハ爐竈ヲ安ンジテ火ヲ進メテ藥ヲ燒ク⁽⁷⁾。意想セヨ、爐紅ク竈熱シタルヲ見レバ、丹藥方ニ成ラン。意想セヨ、青龍ハ左ニ在リ、白虎ハ右ニ在リ、朱雀ハ前ニ在リ、玄武ハ後ニ在リ⁽⁸⁾。四坐ノ大神、オノオノ手ニ長キ鎗、闊キナ劍ヲ執リ、藥爐ヲ看定シ、ミズカラ妙藥ヲ服ス。モシ人、コノ功ヲ累ネテ行エバ、永ク長生ヲ得、邪氣ヲシテオノズカラ散ジ、眞氣ヲシテオノズカラ生ゼシメン。口ニ荆山ノ玉泉ヲ飲ム若ク、口中自然ニ香甜ナリ。二ツノ下穴通達⁽¹⁰⁾、腎堂、呼吸ニ隨ツテコレヲ取リ、寶氣口ニ入リテ、嗽スルコト三十六遍、雪花トナス。咽シテ丹田ニ入リ、雪トナルナリ⁽¹¹⁾。隨後、便チ上合シ下閉ジ、乾坤相合シテ、眞氣滿足シ、脾暖カキモノ、萬病消除ス。竈中ニ瓦ヲ燒クニ似テ、時到レバ自然成ル。雞ノ卵ヲ抱キ、婦人ノ懷胎スルガ如ク、時候ヲ計ラズ。

タダ身中に疼痛ヲ覺ユルハ、スナワチ鐵黑牛車ヲ搬ブナリ。⁽¹³⁾コレ、眞一ノ氣、眞一ノ性。黒トハ下氣ナリ。痛氣ハ大便ニ出、腫氣ハ小便ニ出ル。マタ、天關⁽¹⁴⁾地軸ヲ降ルノ法アリ。項陽關⁽¹⁵⁾、泥丸宮⁽¹⁶⁾ヲ望ンデ、鼻中ニ眞氣ヲ長ク引き、口ニ入レテ大呵スルコト六遍ヲ作ス。天關地軸、死シタル如ク動カズ。毎日行宮スルモノ、常ニ陰陽ヲ調和ス。

(1) 未詳。眞龍虎九仙經・太上靈寶淨明九仙水經・太上中黃眞經には、この文章なし。

(2) 〈性命圭旨〉〈魂魄圖〉に「陽神日魂、陰神月魄。魂之與魄、互爲室宅」とある。

(3) 未詳。甲子・甲戌などの干支ではあるまい。五行の方術としての六甲か、六神としての六甲であろうか。

(4) 黃帝の六相（蚩尤・太常・奢龍・祝融・大封・后土）にかりたものか、或いは佛教の六相（總相・別相・同相・異相・成相・壞相）をとったものか。八識は^(a) (6) 参照。

(5) 四参照。

(6) 四参照。長生降臺は未詳。或いは十國で句とすべきか。

(7) 〈天仙正理直論増注〉巻後〈煉藥直論第七〉に「沖虛子曰、仙道以精炁神三元爲正藥。以煉三合一、喻名煉藥。其理最精微、其法最秘密。昔鍾離曾十試於呂祖、丘祖受百難於重陽」とある。

(8) 〈傳道集〉〈論內觀第一六〉に次のようにある。

呂曰、……進火燒丹煉藥者、其想如何。

鍾曰、其想也、一器如鼎如釜。或黃或黒。形如車輪。左青龍、右白虎、前朱雀、而後玄武。傍有二臣^{火臣}衣紫袍。躬身執圭而立……

また、〈悟眞篇正義〉巻中「四象會時玄體就」の注に「四象者、卽青龍・白虎・朱雀・玄武也。謂四象聚會於

『重陽真人金關玉鎖訣』について

勾陳中宮、乃五行完全。是三家相見也」とある。

(9) 《傳道集》〈論河車第二〉に「委金男搬入金闕^{丸泥}玉泉千派」とある。

(10) 三(1)③④(5) 参照。《仙學辭典》は、脊俞を後三關の中關にあてている。

(11) 雪を象徴的に使う表現は多い。たとえば、

《重陽全真集》卷二・七裏〈和武功趙清明〉地雷震雨出山頭 浣濯黃芽調白雪

《同》卷二・九表〈贈京兆杜先生〉休言白雪與黃芽 莫說鉛銀與汞砂

など。

(12) 三(1)②a(11) 参照。

(13) 三(1)③a(6) 参照。

(14) 《金丹大成集》〈金液還丹論〉に「首有九宮、上應九隅。其中一宮曰天心。一曰……天關」とある。

(15) 項は頂の誤り。b 参照。

(16) 《金丹大成集》〈金丹問答〉に「頭有九宮、中曰泥丸」とある。

以上が、《金關玉鎖訣》の核心をなす、修行の理論とその実践法である。その大畧をいえば、およそ次のようになるであろう。五臓を始めとする身體の各部位と、體液の循環や呼吸運動を含めたそれらの活動は、五行や八卦に配當され、更に、四時の推移と晝夜の交替の如き自然現象と相關させられる。即ち、外界の秩序が身體の秩序の原理とされ、病氣や死の如きは、その秩序の對應が不正であるためとされ、従って、修行は、その對應の正確な一致を求める

ことに外ならない。その修行は、ほぼ三段階に分けられるようであり、その第一は、火である心中に含まれる眞水と、水である腎中に含まれる眞火とが、下丹田の黃庭で調和することであり、本稿では②の水火論がそれにあたる。調和した段階は、下元の寶が成ったこととされ、第二段階として、その寶が、脊髓を通じて腦に運ばれる。肘後飛金晶の法がそれであり、本稿では③の三寶搬運論に相當する。最後に、精氣は腦の上田から再び中田下田の方にめぐらされるが、④の行功論は、ほぼこれらの全般的な説明である。唾液の咽下や呼吸もこれに關係し、身體全體に眞氣が満ちるとされる。本文は、細部に不明な點や錯誤が多く、また必ずしも前後一貫しているとも思われないが、ほぼ以上のようなものと考えてよいであろう。では、かかる修行を、現實的な次元でみた時、どのような意味をもつか、それを效用面として、次に纏める。

(2) 效用面

① 精血論

① 問曰「男子女人、忽時便有疾病無常、何如也。」答曰「爲一切男子女人、心著慾樂貪戀境界之事、白日不斷無名煩惱、夜間境中不能斷三尸陰鬼、男子損却精、女人損却血、炁三寶、走却元陽、故乃人有疾病無常也。不聞神仙之語。人似破漏房屋、主人不修補者、宮殿倒塌、壞其梁柱。是人有疾病也。」〔一〇表裏〕

問イテ曰ク「男子女人、忽時ニスナワチ疾病無常アルハ何ゾヤ。」答エテ曰ク「一切ノ男子女人、心ハ慾樂貪戀ノ

境界ノ事ニ著キ、白日ニ無名ノ煩惱ヲ斷タズ、⁽³⁾夜間ノ境中ニ三尸ノ陰鬼ヲ斷ツ能ワズ、⁽⁴⁾男子ハ精ヲ損却シ、女人ハ血ヲ損却シ、⁽⁵⁾三寶、元陽ヲ走却スルガ爲ニ、故ニスナワチ人疾病無常アルナリ。神仙ノ語ヲ聞カズヤ。人ハ破漏ノ房屋ニ似テ、主人修補セザルモノハ、宮殿倒塌シ、ソノ梁柱ヲ壞ス。コレ、人、疾病アルナリ。」

(1) 如字は衍か。病氣の原因については、

萬病者、各有來處。「二三裏」

人有萬病者、每一病、各一般眞功治、其病自應也。「二三表」

などの表現がある。

(2) 以下、次項⑤と似る。

(3) 一〇(1) 参照。

(4) 二(1)③(24) 参照。また、「問曰、陰鬼如何治之。答曰、用刀圭之法」(「一六表」とある。刀圭については、

三(1)②⑥①参照。

(5) 三字衍す。④と比較して、或いは「耗散眞氣」に作るべきか。

(6) 《傳道集》《論水火第七》に「眞氣在心、心是液之源。元陽在腎、腎是氣之海」とある。また《五篇靈文》序の「雖然外來、實由內孕」の重陽注に「萬物負陰而抱陽。人之一身、四大、雖屬陰濁、內含一點先天元陽」とある。

⑥ 問曰「既爲人、因甚生死先後者、何也。」答曰「先死者、爲其人心著欲樂貪戀境界。是男子者、損精。婦人損

血。白日不斷無名煩惱、夜中不斬三屍陰鬼。男子婦人、已有無常也。」「二裏」

問イテ曰ク「因甚生^{ナレシ}死ニ先後アルハ何ゾヤ。」答エテ曰ク「先ニ死ス者ハ、ソノ人ノ心、欲樂貪戀ノ境界ニ著ク爲ナリ。コレ、男子ハ精ヲ損ジ、婦人ハ血ヲ損ズ。白日ニ無名ノ煩惱ヲ斷タズ、夜中ニ三屍ノ陰鬼ヲ斬ラズ。男子婦人、已ニ無常アルナリ。」

◎ 今人修道者、却不修眞道⁽¹⁾。道者、了達性命也。性命者、是精血也。人有萬病。是病者、皆傷人之命矣。有疾病者、盡不干五臟之事⁽²⁾、都是損了精氣血三寶⁽³⁾。欲要安樂長生者、除是持清靜之識。〔五表〕

今人ノ道ヲ修スルハ、却ッテ眞道ヲ修メズ。道トハ、性命ニ了達スルナリ。性命トハ、精血ナリ。人ニ萬病アリ。コノ病ハ、皆人ノ命ヲ傷ツク。疾病アルモノハ、盡ニ五臟ノ事ニ干スノミナラズ、都テ精氣血ノ三寶ヲ損了ス。安樂長生ヲ欲要スルモノハ、除是清靜ノ識ヲ持セヨ。

(1) 今人については、また「嘆曰、今人能道、不能造。能説、不能訣。又曰、行功、心行、意不行。今人多迷、不修身體」「七裏」ともいう。

(2) 三(1)①④(5) 参照。「是病者、皆傷人之命矣」は萬病を注した挿入句であり、従つて、續きをよくする爲に「有疾病者」を更に挿入したもののか。

(3) 《五篇靈文》序の「以三寶爲基、外三寶不漏、內三寶自合也」の重陽注に「內三寶者、精氣神、是也。外三寶者、耳目口、是也」とあつて、三寶の數え方が違つている。

④ 今修行者、不知身從何得、性命緣何生。訣曰、皆不離陰陽所生、須借父精母血。二物者、爲身之本也。今人行、都不惜父精母血、耗散真氣、損却元陽。故有老、老有病、病中有死。既有無常、何不治之。〔三裏〕

今ノ修行スル者ハ、身ノ何ニ從ツテ得、性命ノ何ニ緣リテ生ズルカヲ知ラズ。訣ニ曰ク、皆陰陽ノ生ズル所ヲ離レズ、スベカラク父ノ精母ノ血ヲ借ル。二物ハ、身ノ本ヲ爲スナリ。今人ノ修行、都テ父精母血ヲ惜シマズ、真氣ヲ耗散シ、元陽ヲ損却ス。故ニ老アリ、老ニ病アリ、病中死アリ。既ニ無常アリ、何ゾコレヲ治セザランヤ。

⑤ 訣曰、精血者、是肉身之根本。真氣者、是性命之根本。故曰、有血者、能生真氣也。真氣壯實者、自然長久、聚精血成形也。〔二表〕

訣ニ曰ク、精血ハ肉身ノ根本ナリ。真氣ハ性命ノ根本ナリ。故ニ曰ク、血アルモノ、能ク真氣ヲ生ズルナリ。真氣ノ壯實ナルモノ、自然長久ニシテ、精血ヲ聚メテ形ヲ成スナリ。

② 清 靜 論

① 問曰「不死之人、何也。」答曰「不死者、爲其人身清靜無垢、惜真炁在丹田、精血不衰、其人不死也。」難曰「多見今人、清靜休妻⁽²⁾、亦不能成道者、何也。」答曰「雖是此人清靜、却不達真清靜之功。其人雖是一身清靜、却不能定於精血養真氣。此人身清、心不清。其身靜、意不靜。豈不聞《清靜經》⁽³⁾云『夫道者、有清有濁。有動有靜』、『清者濁之源。動者靜之基』、《經》⁽⁴⁾云『不垢不淨』。若論真清靜者、眼內無淚、鼻內無膿、口內無唾、不鍊大小便。男子養

精、女子定血。萬邪歸正、萬病不生。方可是丹田清靜。今人說清靜者、都是假名。」〔二裏—三表〕

問イテ曰ク「不死ノ人トハ何ゾヤ。」答エテ曰ク「不死トハ、ソノ人ノ身清靜無垢ニシテ、眞炁ヲ惜ンデ丹田ニアリ、精血衰エズ、ソノ人不死ナリ。」難ジテ曰ク「多ク今人ヲ見ルニ、清靜ニシテ休妻スルモ、マタ道ヲ成ス能ワザルハ、何ゾヤ。」答エテ曰ク「コノ人清靜ナリト雖モ、却ッテ眞ノ清靜ノ功ニ達セズ。ソノ人、一身清靜ナリト雖モ、却ッテ精血ヲ定メ眞氣ヲ養ウ能ワズ。コノ人、身清ケレドモ心清カラズ、ソノ身靜ナレドモ意靜ナラズ。豈ニ、《清靜經》ニ『ソレ道トハ、清アリ濁アリ、動アリ靜アリ』、《清トハ濁ノ源。動トハ靜ノ基》ト云イ、《經》ニ『垢ナラズ淨ナラズ』ト云ウヲ聞カズヤ。モシ眞ノ清靜ヲ論ズレバ、眼内涙ナク、鼻内膿ナク、口内唾ナク、大小便ヲ鍊ラズ。男子ハ精ヲ養イ、女子ハ血ヲ定ム。萬邪正ニ歸シ、萬病生ゼズ。方ニ丹田清靜ナルベシ。今人ノ清靜ヲ説クハ、都テ假名ナリ。」

(1) 《丹陽語錄》八表に「清淨者、清爲清其心源、淨爲淨其炁海」とある。

(2) 休妻は離縁すること。《悟眞篇正義》卷上「休妻謾遣陰陽隔……」は「且如休妻棄妾、而謾道爲陰陽之隔」と注解される。なお、遣は「當作道、乃字相類之誤也」と割注されている。休妻は小法であり、《傳道集》《論大道第二》に「以旁門小法、易爲見功……有離妻者……旁門小法、不可備陳」とある。

(3) 太上老君說常清靜妙經「藏三—四」。また、太上老君清靜心經「藏八—三九」も同じ。

(4) 般若心經。

(5) 《養性延命錄》卷下《導引按摩篇第五》「自六ノ四」に「解云、一曰精、二曰唾、三曰淚、四曰涕、五曰汗、六曰溺、皆所以損人也」とある。また、清濁については、《金丹大成集》《金丹問答》に「陽清而陰濁也。清

者、浮之於上。濁者、沈之於下。修丹者、留清去濁、蓋清屬陽、而濁屬陰也」とある。

⑤ 清不離濁、動不離靜。⁽¹⁾ 靜中便生動、濁中便自有清。⁽²⁾ 有天地、有日月、有水火、有陰陽、謂之眞道。《經》云「純陽而不生、純陰而不長。陰陽和合者、能生萬物。」〔五表〕

清ハ濁ヲ離レズ、動ハ靜ヲ離レズ。⁽¹⁾ 靜中スナワチ動ヲ生ジ、濁中スナワチオノズカラ清アリ。天地アリ、日月アリ、⁽²⁾ 水火アリ、陰陽アリ、コレヲ眞道トイウ。《經》ニ云ウ「純陽ニシテ生ゼズ、純陰ニシテ長ゼズ。陰陽和合スルモノ、能ク萬物ヲ生ズ。」

(1) 前項(5) 參照。表現上は清濁・動靜の調和に道ありとみるが、實際は、前項「眼内無淚」以下、所謂留清去濁の立場であらう。

(2) 以下は、直接には自然界を云うものであるが、また、身體も意識されているとみてよい。《丹陽語錄》六表に次のようにいう。

經〔清靜經〕云「人能常清淨、天地悉皆歸。」言天地者、非外指覆載之天地也。蓋指身中之天地也。人之膈已上爲天。膈已下爲地。若天氣降、地脉通、上下沖和、精氣自固矣。

⑥ 問曰「如何治於病疾。」訣曰「除眼大良藥。」⁽¹⁾ 解曰「長大歡爲良藥。」訣曰「歡喜者是藥之根本。常煩惱者、是萬病之根本。或常清靜者、是大道之苗。但見今人修行、或僧道五戒、⁽²⁾ 男子婦人、却因甚病疾無常。或男子女人、有夫無婦者、⁽³⁾ 丹田走却靈龜、⁽⁴⁾ 耗散眞炁、下元虛冷、⁽⁵⁾ 漸生萬病。男子清靜六十四日、精炁滿。女子清靜四十九日、血炁滿。

物極者、則返。清爲濁返、靜爲動返。心意散失、九竅走却眞氣。炁濁、令女子月水多、男子夜夢陰境、盜了七珍八寶⁽⁶⁾。故人有疾病也。」(一五裏——一六表)

間イテ曰ク「如何ニ病疾ヲ治サンヤ。」訣シテ曰ク「除眼⁽¹⁾ノ大良藥。」解シテ曰ク「長ク大イニ歡ブヲ良藥トナス。」訣シテ曰ク「歡喜ハ藥ノ根本ナリ。常ノ煩惱ハ萬病ノ根本ナリ。或イハ常ノ清靜ハ大道ノ苗ナリ。タダ今人ノ修行ヲ見ルニ、或イハ僧道ノ五戒⁽²⁾シテ、男子婦人却ッテ因甚⁽³⁾病疾無常ナルカ。或イハ男子女人、夫アリ婦ナキモノ、丹田ハ靈龜⁽⁴⁾ヲ走却シ、眞炁ヲ耗散シ、下元虛冷ニシテ、漸ヤク萬病ヲ生ズ。男子ハ清靜ナルコト六十四日ニシテ精炁滿ツ。女子ハ清靜ナルコト四十九日ニシテ血炁滿ツ。物、極マルハ則チ返ル。清ハ濁ノ返トナリ、靜ハ動ノ返トナル。心意散失シ、九竅ハ眞氣ヲ走却ス。炁濁リテ、女子ヲシテ月水多カラシメ、男子ヲシテ夜ニ陰境ヲ夢ミサシメ、七珍八寶ヲ盜了⁽⁹⁾ス。故ニ、人疾病アルナリ。」

(1) 未詳。眼は根あるいは是の譌か。

(2) 佛教の五戒は、《魏書一〇》《釋老志第二〇》に「不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒」とある。道教の五戒も同様であろう。《說戒》に《老君說五戒》があり、五戒の意味を説いており、また《思微定志經十戒》の始めの五つは「不殺・不淫・不盜・不欺・不醉」である。

(3) 句に誤りあるか。

(4) 《性命圭旨》《和合四象圖》に「天一生水、位居北。其象玄武」とあり、龜の圖を載せる。

(5) 三(1)③④(4) 参照。

(6) 二(1)①(17) 参照。

③ 有 難 論

(a) 問曰「假令一身清靜、却逢天魔⁽¹⁾之日、如何治之。又假令逢外道波巡⁽²⁾、請曰如何治之。」答曰「波巡者、界也。

境界、皆有。只要識進退三要⁽³⁾、辨清濁⁽⁴⁾。若逢陰陽者、加火入水、却濁不相煎之法。」訣曰、假令魔軍來時、急須準備、

檢三千強兵。訣曰、三千、疏眞功⁽⁶⁾。強兵者、爲其氣也。有來無去、千息數、積其氣在丹田不散。只教暖不教冷、自結

胎仙⁽⁷⁾、爲妙法也。若人得如上妙者、永得如上眞功。功成果滿、永得安樂長生。一切修功之人、臨有難之日、小心準備。

〔五裏一六表〕

問イテ曰ク「假令^{モシ}一身清靜ナレドモ却ッテ天魔⁽¹⁾ニ逢ウノ日、如何ンガコレヲ治スヤ。マタ、假令^{モシ}外道ノ波巡⁽²⁾ニ逢ワ

バ、請イテ曰ク、如何ンガコレヲ治スヤ。」答エテ曰ク「波巡トハ界ナリ。境界、皆アリ。タダ進退三要⁽³⁾ヲ識リ、清

濁ヲ辨ズルヲ要ス⁽⁴⁾。モシ陰陽ニ逢ウモノハ、火ヲ加エ水ヲ入レ、濁ニシテ相煎ゼザルノ法ヲ却ゾク。」訣ニ曰ク、假令

魔軍ノ來タル時ハ、急ギ須ラク準備シ、三千ノ強兵ヲ檢スベシ。訣ニ曰ク、三千ハ眞功ヲ疏ス⁽⁶⁾。強兵トハソノ氣ヲナ

スナリ。來タルアリ去ルナク、千息數、ソノ氣ヲ丹田ニ積ミテ散ゼズ。タダ暖メシメ、冷ヤシメズ。オノズカラ胎仙

ヲ結ビ⁽⁷⁾、妙法ヲナスナリ。モシ人、上ノ如キ妙ヲ得レバ、永ク上ノ如キ眞功ヲ得。功成リ果滿チテ、永ク安樂長生ヲ

得。一切ノ功ヲ修スル人、有難ノ日ニ臨ンデ小心ニ準備セヨ。

(1) 陰魔・陰鬼・外魔・魔軍など、みな同じであらう。《傳道集》《論內觀第一七》に、

陰鬼外魔、因意生像、因像生境、以爲魔軍。奉道之人、因而狂蕩、入於邪中、或失身外道、終不能成仙。

蓋以三戸七魄、願人死而自身快樂、九蟲六賊、若人安則存留無處也。

とあり、また《悟眞篇正義》上卷「消盡陰魔鬼莫侵」の注に「其陰魔消盡、而爲純陽之軀、則鬼魅安敢侵犯哉」とある。

(2) 即ち波旬で、佛教でいう惡魔である。後秦・僧肇撰《注維摩詰經》卷四《菩薩品》に「什曰、波旬、秦言殺者。常欲斷人慧命、故名殺者。亦名爲惡中惡」(正三八、三六五中)とある。

(3) 《金丹大成集》《金丹問答》に次のようにある。

問曰、何謂內三要。

答曰、第一要大淵池也。第二要絳宮也。第三要地戶也。

問曰、何謂外三要。

答曰、口之與鼻共三竅、是神氣往來之門戶。下功之際、調鼻息、緘舌氣、閉兌也。

(4) 《傳道集》《論眞仙第一》に「先要識龍虎、次要配坎離、辨水源清濁」とある。

(5) 陰陽は陰鬼の誤りか。

(6) 《金丹大成集》《解註呂公沁園春》、「蓬萊路、仗三千行滿」の注に「乃三千功行、乃九年抱一之數也」とある。

(7) 《傳道集》《論抽添第二》に「抽鉛添汞、一百日藥力全、二百日聖胎堅、三百日胎仙完」とある。

(b) 問曰「如何治之。」解曰「人臨有難之日、先見其死相。」問曰「如何是死相。」訣曰「天柱動搖、樹倒山摧、六神俱亂、性命不能保、精神恍惚⁽²⁾、天地闇、日月無光。便是無常之苗也。有漏之身、爲地獄。無漏之果、爲天堂。人有漏

『重陽眞人金關玉鎖訣』について

之身、須證無漏之果。圓者、皆共成於道果。」「〔六表裏〕

問イテ曰ク「如何ンガコレヲ治スヤ。」解シテ曰ク「人有難ノ日ニ臨ンデ、マズソノ死相ヲ見ワス。」問イテ曰ク「如何ンガコレ死相。」訣シテ曰ク「天柱動搖シ、樹倒レ山摧レ、六神トモニ亂レテ、⁽¹⁾性命ヲ保ツ能ワズ、精神恍惚トシテ、⁽²⁾天地闇ク、日月光ナシ。スナワチ無常ノ苗ナリ。有漏ノ身ハ地獄トナリ、無漏ノ果ハ天堂トナル。人ハ有漏ノ身、スベカラク無漏ノ果ヲ證スベシ。圓カナルハ、皆トモニ道果ヲ成ス。」

(1) 《紫清指玄集》《快活歌》〔精・七〕に「五臟六腑各有神」とある。

(2) 或いは性命ハ精神ノ恍惚ヲ保ツ能ワズと讀むほうが無理はないが、内容的にみて本稿の如く讀んでおく。

◎ 問曰「假令逢冤魔者、如何治之。」訣曰「宜清靜。忙中偷閑、閑中取靜。若人有難之時、急須回避⁽¹⁾心王、復用灌想之法。⁽²⁾急驅神意入上泥丸神宮。正坐、意想、眼見⁽³⁾前仙男仙女、各動仙樂。叩齒定意、看崑崙山景、見上牛羊鹿馬玉兔。⁽⁴⁾意想、上拿住繫。定功時、忽思上有一寶樹。樹上有花。花開結子。意滴取吞之。是喫了此物者、永得安樂長生。此是、修正法。一句了然、大牢鎖四門。」「〔一一表裏〕

問イテ曰ク「假令冤魔ニ逢ワバ、如何ガコレヲ治スヤ。」訣ニ曰ク「宜シク清靜ナルベシ。忙中閑ヲ偷ミ、閑中靜ヲ取ル。モシ人、有難ノ時ハ、急ギスベカラク心王ヲ回避⁽¹⁾シ、スベカラク灌想ノ法ヲ用ウベシ。⁽²⁾急ギ神意ヲ驅リテ上泥丸ノ神宮ニ入レヨ。正坐シテ意想セヨ、眼前ニ仙男仙女ノオノオノ仙樂ニ動ズルヲ見レバ、齒ヲ叩イテ意ヲ定メ、崑崙山ノ景ヲ看ヨ。上ニ牛羊鹿馬玉兔ヲ見レバ、意想セヨ、上ニ拿住シ繫ゲ。功定マル時、忽チ思上一寶樹アリ。樹上花アリ。花開イテ子ヲ結ブ。意、摘取シテコレヲ吞ム。コノ物ヲ喫了スルモノ、永ク安樂長生ヲ得。コレ正ヲ修ス

ルノ法ナリ。一句了然セバ、大イニ四門ヲ牢鎖セヨ。」

(1) 未詳。句に誤りあるか。

(2) 《傳道集》《論内觀第一六》に次のようにある。

呂曰、所謂存想内觀、大畧如何。

鍾曰、如陽升也、多想爲男……爲馬……爲花……。若此之類、皆内觀存想、以應陽升之象也。如陰降也、

多想爲女……爲牛……。若此之類、皆内觀存想、以應陰降之象也。

(3) 眼見前は眼前見の錯誤であらう。

(4) 《金丹大成集》《金丹問答》に「問、金烏玉兔。答曰、日中烏、比心中之液也。月中兔、比腎中之氣也」とある。

④ 問曰「假令白牛去時、如何擒捉。」⁽¹⁾ 訣曰。白牛去時、緊叩玄關、牢鎖四門。⁽²⁾ 急用仙人釣魚之法。又用三鳥手印、指黃河逆流、掩上金關、納合玉鎖。⁽⁴⁾ 如人斬眼、白牛自然不走。名機出水登彼岸之法。有十般定性命之法。訣曰。一名、金關玉鎖定。二名、三鳥回生換死定。⁽⁵⁾ 三名、九曲黃河逆流定。是名無漏果。圓者、皆共成於仙道。若定了寶時、休教滯了腰脚、昏了眼目。此是、定三寶之法。⁽⁶⁾〔六裏〕

問イテ曰ク「假令白牛去ル時、如何シガ擒捉スルヤ。」訣ニ曰ク。白牛去ル時、玄關ヲ緊叩シ、四門ヲ牢鎖ス。⁽²⁾ 急ギ仙人魚ヲ釣ルノ法ヲ用ウ。マタ、三鳥ノ手印ヲ用イテ黃河ノ逆流ヲ指シ、上ノ金關ヲ掩イ、玉鎖ヲ納合ス。⁽⁴⁾ モシ人眼ヲ斬ラバ、白牛ハ自然走ラズ。出水ニ機ンデ彼岸ニ登ルノ法ト名ヅク。十般ノ性命ヲ定メル法アリ。訣ニ曰ク。一

ニ金關玉鎖定ト名ヅク。二三島生ヲ回シテ死ヲ換エルノ定ト名ヅク。⁽⁵⁾三ニ九曲ノ黃河逆流ノ定ト名ヅク。コレ無漏ノ果ト名ヅク。圓カナルハ皆共ニ仙道ヲ成ス。モシ寶ヲ定了セシ時ハ、腰脚ニ滯了セシムルナカレ、眼目ヲ昏了セシムルナカレ。コレ、三寶ヲ定ムルノ法ナリ。⁽⁶⁾

- (1) 《養生内功秘訣》《道語辭解》に「大力之白牛。佛語、譬喻衆の發生活動」とある。然らば白牛は性命であり、白牛去時は有難之日と同じであらう。《重陽全真集》卷二・一表裏《贈僧肇法師》に「□皮黑去黃芽現□箇青牛吼白牛」などと使われている。

- (2) 三(1)④d (1) (2) 参照。

- (3) 三(1)③a (8) 参照。

- (4) 三(1)④b (7) 参照。

- (5) 《悟真篇正義》卷中「須將死戸爲生戸、莫執生門號死門」の注に、

生死之門戸者、乃天人造化之關鍵也。……至於人身之中、其上之口鼻、乃呼吸出入、爲生我之門也。若閉而絕之、則死吾之戸矣。……其下之元海、雖無孔竅之開、可以爲門、然實精氣之樞、則以爲戸耳。……とあるが、ことと關係するかもしれない。

- (6) 《傳道集》《論還丹第一三》に「所謂精氣神、乃三田之寶」とある。なお、《金關玉鎖訣》では、三寶は精氣血である。三(2)①c (3) 参照。

④ 治病その他

③ 及春夏秋冬、但小兒小便黃色者、是丹田虛敗、失却下元存眞炁。急用穿九曲之法。又名九轉穿小腸、九透眞炁入腎堂。小便自然青白色也。一身便得安樂。〔一二表〕

春夏秋冬ニ及ンデ、タダ小兒ノ小便ノ黃色ナルハ、丹田虛敗シテ、下元ニ眞炁ヲ存スルヲ失却スルナリ。急ギ九曲ヲ穿ツノ法ヲ用イヨ。マタ、九轉シテ小腸ヲ穿チ、九透シテ眞炁腎堂ニ入ルト名ヅク。小便自然青白色ナリ。一身、スナワチ安樂ヲ得。

④ 難曰「因甚小兒清靜、不損三寶、亦有疾病無常者、何也。」訣曰「小兒有病者、昔日在母腹中、因母血氣虧弱、受母十月胎氣不足。又或犯風淫暑濕四集、不忌受胎小兒、故有疾病無常也。」〔一〇裏〕

難ジテ曰ク「因甚小兒清靜ニシテ三寶ヲ損ゼザルモ、マタ疾病無常アルハ、何ゾヤ。」訣シテ曰ク「小兒ノ病アルハ、昔日、母腹中ニアリテ、母ノ血氣ノ虧弱ナルニヨリ、母ノ十月ノ胎氣足ラザルヲ受ク。マタ或イハ、風淫暑濕ノ四集ニ犯サルルモ小兒ヲ受胎スルヲ忌マズ、故ニ疾病無常アルナリ。」

(1) 三(1)④には「風寒暑濕」とある。淫は寒の誤りか。

⑤ 問曰「因甚有醜好之人、何謂也。」訣曰「貌正者、是日、父母二氣感應日月、午時已前、丑時已後。便得端正眞實、長命有衣祿。貌正、得父母喜悅之心。午時已後、丑時已前受胎、有一貌不正者、或病聾暗瘡、多性劣、不得人意命窮、無衣祿、壽命不長也。此是、造化之根本也。」〔一一表〕

問イテ曰ク「因甚、醜好ノ人アル、何ノ謂ゾヤ。」訣シテ曰ク「貌正ナル者ハ、コノ日、父母ノ二氣日月ニ感應スル

コト午時已前、丑時已後、スナワチ端正眞實ニシテ、長命、衣祿アルヲ得タリ。貌正ナルハ父母ノ喜悅ノ心ヲ得ル。午時已後、丑時已前、受胎スレバ、一貌ノ正シカラザルモノアリ、或イハ聾^{シコ}、暗瘡^{オシ}ヲ病ミ、多ク性劣リ、人ノ意ヲ得ズ、命窮シテ衣祿ナク、壽命長カラザルナリ。コレ、造化ノ根本ナリ。⁽²⁾

(1) 日字は衍か。

(2) 腎中の氣の發生と運行に關係するか。三(1)①⑥(1) 參照。

④ 難曰「因何人肥者先衰。」訣曰「肥人者、修外不修裏。骨中無髓。丹田走却眞炁、故衰病也。修內道者、安樂長生之苗。」〔一六裏〕

難ジテ曰ク「何ニ因リテ人ノ肥ユル者先ニ衰エルヤ。」訣シテ曰ク「肥人ハ、外ヲ修メ裏^{ウラ}ヲ修メズ。骨中ニ髓ナク、丹田眞炁ヲ走却ス、故ニ衰病スルナリ。內道ヲ修メルハ、安樂長生ノ苗ナリ。」

本節に纏めたものは、前節でみたさまざまな修行が、現實的にどのような意味をもつかを論じている。まず、病氣や死の原因として精血の損却がいわれるが、嚴密には、身體には精血が、性命には元陽たる眞炁が根本のものとされる。従つて、それらを損却しないことが、修行の主たる目的である。それを具現した状態、即ち、精血が調和し、眞炁が充滿した状態が清靜である、といわれる。次に、實際に有難の日に臨んだ時の方法や、平日の準備が論じられ、身體内部のメカニズムに注視する灌想の法や、性命を定めるためのさまざまな方法がのべられる。これらは、結局は、精血を損じない清靜の状態をどのようにして保つか、という問題に外ならない。④に纏めたものは、理論の中心的問題で

はなく、實際に提出された疑問に答えたものであろう。要するに、彼等の關心は、安樂な不老長生の域を出ないようである。

四 象 徴

本章は、修行の段階を、修行者が前進するにつれて、次つぎに眼前に展開される光景として、象徴的に示したものである。ただし、必ずしも、本稿で整理した段階通りではなく、また、とくに最後の部分は未完の感じがもたれる。比較的長文であるから、便宜上數段に分つて検討する。

夫修行者、外有條大道教⁽¹⁾、内有正路。無人知處。大衆前行三里、見三條大澗、亦無底。怎生過去⁽²⁾。訣曰、三條大澗者、是三教三乘。起三屍、定三寶、超三界。向前又行三里、見六條深溝、不能前進。是何門。訣曰、是六度萬行⁽³⁾。六根清靜、斬六賊、戒六欲、樹六梯。向前又行三里、見三產枋⁽⁴⁾。是寶淨枋、七林屍多、便是臨作用。行三里、又見一座園、名爲舍果園。一翁看定園門、有緣者空手得過。〔一八表裏〕

ソレ修行ハ、外ニ大道教アリ⁽¹⁾、内ニ正路アリ。人ノ處ヲ知ルナシ。大衆、前行スルコト三里、三條ノ大澗ヲ見ル。マタ底ナシ。怎生過去セン⁽²⁾。訣ニ曰ク、三條ノ大澗トハ、三教ノ三乘ナリ。三屍ヲ起シ⁽⁴⁾、三寶ヲ定メ、三界ヲ超エル。前ニ向ッテマタ三里ヲ行ク。六條ノ深溝ヲ見ル。前進スル能ワズ。コレ何ノ門ゾ。訣ニ曰ク、コレ、六度ノ萬行⁽³⁾。六根清靜、六賊ヲ斬リ、六欲ヲ戒シメ、六梯ヲ樹ツ。前ニ向ッテマタ三里ヲ行キ、三產枋ヲ見ル⁽⁴⁾。コレ寶淨枋。七林屍多ク、スナワチ作用ニ臨ム。三里ヲ行キ、マタ一座ノ園ヲ見ル⁽⁵⁾。名ヅケテ舍果園トナス。一翁、園門ヲ看定ス。緣ア

ルモノ、空手ニテ過グルヲ得。

(1) 條上、一字あるべきか。教字は衍か。

(2) 去は之の譌か。ドウシテコレヲ過ギョウゾの意。

(3) 六度萬行は二(4)◎参照。六根清靜は二(1)①(10)参照。六賊は二(1)①(18)参照。

(4) この項未詳。句に誤りあるか。

(5) 又字は行三里の上にくるもの。さらに向前の二字を脱すか。

向前園⁽¹⁾又行三里、見一根大樹上、繫定金牛。河邊上、有座臺。男子黃金臺、女子鳳凰臺、神仙釣魚臺、安樂千花臺、若無常望鄉臺。河口有三箇女子⁽²⁾、渡口、便是魔女衆。滿舟船過此河。又行三里、見一座大山、名是須彌山。山東坡、有一隻青羊、是老君之炁。西坡、見一隻白羊、是夫子之炁。正南、見一隻黃羊、是大覺金仙之炁。三箇羊兒、引接大衆、入山。名三陽聚鼎山。(一八裏)

前ニ向ッテ、園⁽¹⁾、マタ三里ヲ行ク。一根ノ大樹上、金牛ヲ繫定スルヲ見ル。河ノ邊上^{ホトリ}、座臺アリ。男子黃金臺、女子鳳凰臺、神仙釣魚臺、安樂千花臺、若無常望鄉臺。河口ニ三箇ノ女子⁽²⁾アリ、ロヲ渡ス、スナワチ魔女衆ナリ。舟船ヲ滿タシテコノ河ヲ過グ。マタ三里ヲ行キ、一座ノ大山ヲ見ル。名ハ須彌山ナリ。山ノ東坡ニ、一隻ノ青羊アリ、コレ老君ノ炁ナリ。西坡ニ一隻ノ白羊ヲ見ル、コレ夫子ノ炁ナリ。正南ニ一隻ノ黃羊ヲ見ル、コレ大覺金仙ノ炁ナリ。三箇ノ羊兒ハ、大衆ヲ引接シテ山ニ入ル、三陽聚鼎山ト名ヅク。

(1) 園字は衍か。

(2) 《金丹大成集》《金丹問答》に「問曰、何謂三男三女。答曰……坤道索乾、長女曰巽、中女曰離、少女曰兌」とある。

山中有一座城、名爲北城。有四門、門上有牌、牌上有字。東是開光門、西是長生門、南是金光門、北是大淪門。此是、眼耳鼻口。入得四門、見四洞府。天樂洞、白雲洞、竹國洞、長生洞。入得四洞、見四寺、無淨寺、玄空寺、竹林寺、法華寺。⁽¹⁾有四果安禪羅漢。斯陀含、須陀洹、阿那含、阿羅漢、爲四寺主。此是四果仙人也。⁽²⁾〔一八裏—一九表〕

山中ニ一座ノ城アリ。名ヅケテ北城トナス。四門アリ、門上牌アリ、牌上字アリ。東ハ開光門、西ハ長生門、南ハ金光門、北ハ大淪門。コレハ眼耳鼻口ナリ。四門ニ入得スレバ、四洞府ヲ見ル。天樂洞、白雲洞、竹國洞、長生洞。

四洞ニ入得スレバ、四寺ヲ見ル。無淨寺、玄空寺、竹林寺、法華寺。⁽¹⁾四果ノ安禪ノ羅漢アリ。斯陀含、須陀洹、阿那含、阿羅漢、四寺ノ主トナス。コレ、四果ノ仙人ナリ。⁽²⁾

(1) 所引の道藏、三字を脱す。宮内廳本にて補う。

(2) 《呂祖全書》〔下、七四〇—四頁所收〕の火西月編《呂純陽先生編年詩集卷之七》、《禪家四果偈并解》に、解として、

禪家四果者、《金剛經》〔姚秦・鳩摩羅什譯《金剛般若波羅蜜經》、正八所收〕所謂「須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢」是也。須陀洹……即投胎果也。斯陀含……即奪舍果也。阿那含……即移居果也。阿羅漢……皆未降龍伏虎者也。

とあり、また《道家四果偈并解》の解として、

『重陽真人金關玉鎖訣』について

道家四果者、《悟眞篇》〔宋・張紫陽撰。卷下。精・七所收〕所謂「投胎奪舍及移居、舊住名爲四果徒」是也。……此四者、皆不煉陽神者也。

とある。なお、《金剛經》の説明は、

不入色聲香味觸法、是名須陀洹。……一往來而實無往來、是名斯陀含。……不來而實無來〔明本、實無、不來に作る〕是故名阿那含。……實無有法名阿羅漢。……〔七四九中下〕

である。なお、《重陽教化集》卷二・六表の《四果頌》に、次のようにいう。

果來海角天涯 果應師旨夷希 果得前生知友 果然合我心機

向前、又見五觀。第一功名觀、第二醫藥觀、第三安陽觀、第四眞如觀、第五堯率觀。⁽¹⁾五觀中有五宮。雙女宮、是眼。大龍宮、是口。上白宮、是鼻。水晶宮、是耳。天秤宮、是心。內坐大樓閣。上下十二呼吸、名曰十二重樓也。⁽²⁾有中宮樓、月宮樓、天仙樓、取寶樓、聖井樓、法炁、⁽³⁾妙音樓、識道樓、禪頂樓、景陽樓、鍾鼓樓、二聖樓。每年十二月一日十二時、人身中有十二月樓。樓者、按經十二經十二支干。⁽⁴⁾〔一九表裏〕

前ニ向ッテマタ五觀ヲ見ル。第一ハ功名觀、第二ハ醫藥觀、第三ハ安陽觀、第四ハ眞如觀、第五ハ堯率觀。⁽¹⁾五觀ノ中、五宮アリ。雙女宮ハ眼ナリ、大龍宮ハ口ナリ、上白宮ハ鼻ナリ、水晶宮ハ耳ナリ、天秤宮ハ心ナリ。内ニ一座ノ大樓閣。上下十二呼吸。名ヅケテ十二重樓トイウナリ。中宮樓、月宮樓、天仙樓、取寶樓、聖井樓、法炁、⁽³⁾妙音樓、識道樓、禪頂樓、景陽樓、鍾鼓樓、二聖樓アリ。毎年、十二月一日十二時、人身中ニ十二月樓アリ。樓トハ、經ヲ按ズルニ、十二ヲ經テ十二支干ヲ經ル。⁽⁴⁾

(1) 元來は佛教の天名。婆素跋陀造、符秦・鳩摩羅佛提等譯《四阿含暮抄解》下に「梵率陀、秦言止言」〔正二五、一二中〕とある。普通は上足、知足などと譯されるが、欲界の天處の一つ。

(2) 《金丹大成集》《金丹問答》に「問曰、何謂十二重樓。答曰、人之喉嚨管、有十二節、是也」とある。《分梨十化集》卷上・三裏《贈丹陽夫婦芋栗》に「栗子前來看芋頭、二人共食過重樓」、《全真集》卷一・二三裏《述懷》に「重樓傳玉液、雙關鍊金丹」などと使われている。なお、内坐の坐字上、一を脱するか。

(3) 樓字を脱す。

(4) 「按經十二支十干」の誤りか。

四面、又見九宮。是人有九竅也。夫九竅宮者、東有風雷宮、雙林宮。南有紫微宮、牟尼宮。西有聖母宮、惠羅宮。北有梵宮、水晶宮。中央號安宮。此名爲九宮、猶地列九州也。又微府元共計十州也。是十國。焦祖國、牟尼國、開花國、鹿嚴國、金色國、琉璃國、舍衛國、南禪國、天竺國、重陽國。十國者、便是十地。每一地中、一坐泰山。身是甚物、是治種大病、皆傷人命。身有四大海。⁽³⁾津爲東海、血爲南海、髓爲西海、氣爲北海。更有九州、小腸是也。更有五湖、身是洞庭湖、精是玉湖、甘露是醍醐、心爲玄湖、小腸爲江湖。〔一九裏—二〇表〕

四面ニマタ九宮ヲ見ル。コレ、人九竅アルナリ。ソレ九竅ノ宮トハ、東ニ風雷宮、雙林宮アリ。南ニ紫微宮、矣尼宮アリ。西ニ聖母宮、惠羅宮アリ。北ニ梵宮、水晶宮アリ。中央ヲ安宮ト號ス。コレ名ヅケテ九宮トナスハ、猶ヲ地ニ九州ヲ列ネルガゴトシ。マタ、微府元トモ計十州ナリ。コレ十國。焦祖國、牟尼國、開花國、鹿嚴國、金色國、琉璃國、舍衛國、南禪國、天竺國、重陽國。十國ハ、スナワチ十地ナリ。一地ゴトニ中ニ一座ノ泰山アリ。身ハコレ甚⁽²⁾ナニ

物、コレ大病ヲ治ス、ミナ人命ヲ傷ツク。身ニ四大海アリ。⁽³⁾津ヲ東海トナス、血ヲ南海トナス、髓ヲ西海トナス、氣ヲ北海トナス。更ニ九州アリ、小腸コレナリ。更ニ五湖アリ、⁽⁴⁾身ハ洞庭湖、精ハ玉湖、甘露ハ醍醐、心ヲ玄湖トナシ、小腸ヲ江湖トナス。

(1) 元字は衍か。或いは誤倒か。

(2) この句、錯入か。病字の重複を一字脱するか。

(3) 《傳道集》《論水火第七》に「心爲血海、腎爲氣海、腦爲髓海、脾胃乃水穀之海。所謂四海者、如此」とある。

(4) 《傳道集》《論水火第七》に「五藏各有液、所主之位、東西南北中、所謂五湖者、如此」とある。

以上の象徴的敘述は、まず、三教三乗の説明から始まり、六度萬行、三教の氣の光景に移る。これらは、本稿の二で検討した問題といえよう。次に、三教の三陽が集まる北城の敘述は、暗に腎臟と、精氣血の調和を示すものである。ついで、眼耳鼻口や心、重樓、九竅などの、體内の各部位が言及され、元來は修行段階である十地に纏められる。更に、體中における活動の要素たる血氣精などが、四海や五湖として示され、そこで突然、敘述は終了する。三(2)でみたように、修行の根本が精血の調和と眞氣の充滿にあるとすれば、敘述がここで終っても不思議ではないが、《金關玉鎖訣》自體の構成としては、かかる身體の構成と活動を示したあと、總括として三(1)④⑥の行功の論述につながるであろう。ただし、それは、既に本章の如き象徴的表現とは少しく異なっている。本章を獨立して検討した所以である。

五 効 果

これまでの検討で、實は、修行の段階や形式、様々な方法とその具體相、その理論づけなどの解釋は、既に盡き
ている。それ故、ここに纏めたものは、附隨的な項目にすぎない、といえる。それはまず、教理を傳達すべからざる
者についての注意であり、それを守らない場合への威しである。これは蓋し、教理を秘密めかして價值づける常套手
段である。最後に纏めたものは、修行が成った時の、成果の一端といえよう。

(1) 條 件

④ 訣曰、對三人休言說。六耳恐漏神仙之機。訣曰、此三人者、第一對夫不孝之人、第二對夫不敬信之人、第三對
夫不傳戒不善之人、莫說此訣。除此等人外、不分男子女人、僧道官人、皆得傳法受戒。〔二二裏〕

訣ニ曰ク、三人ニ對シテ言說スル休^{やす}レ。六耳ハ恐ラク神仙ノ機ヲ漏ラサン。訣ニ曰ク、コノ三人トハ、第一ニソレ
不孝ノ人ニ對シ、第二ニソレ敬信セザルノ人ニ對シ、第三ニソレ戒ヲ傳エズ善ナラザルノ人ニ對シ、コノ訣ヲ說ク莫
レ。コレヲノ人ヲ除ク外ハ、男子女人、僧道官人ヲ分タズ、皆法ヲ傳エ戒ヲ受クルヲ得。

⑤ 若男子女人、收得此訣、勿可亂傳。如有亂傳者、輕泄仙人妙機、九祖盡墮於沉淪、永鎮酆都、不得人身。慎之
戒之、信受奉行。〔二三表〕

モシ男子女人、コノ訣ヲ收得スレバ、亂リニ傳ウ可カラズ。亂リニ傳エル者、仙人ノ妙機ヲ輕ク泄スアルゴトキハ、九祖コトゴトク沉淪ニ墮チ、永ク酆都ニ鎮ンデ人身ヲ得ズ。慎シミ戒メテ、信受奉行セヨ。

(2) 結果

① 人行轉此功、丹田養熱眞氣、夜間多夢見山上放牛。其牛者、是赤手或青牛。或仙人、道士、宮觀、寺院、大道、好房、高車、好樹。夜見小兒女、并大官人者、並是丹田氣壯。若夢見小道荒棘、惡人趁破房屋、塔墓樹倒、河渡恐怕、並是丹田氣衰弱。宜用補之。〔二二表裏〕

人、コノ功ヲ行轉シ、丹田、眞氣ヲ養熱スレバ、夜間ニ多ク山上ノ放牛ヲ夢ミル。ソノ牛ハ、赤牛或イハ青牛ナリ。或イハ仙人、道士、宮觀、寺院、大道、好房、高車、好樹。夜、小兒女ナラビニ大官人ヲ見ルモノハ、ナラビニ丹田ノ氣壯ンナリ。モシ小道荒棘シ、惡人房屋ニ趁コミ破リ、塔墓樹倒レ、河ノ渡ノ恐怕ヲ夢ミレバ、ナラビニ丹田ノ氣衰弱スルナリ。宜シクコレヲ補ウベシ。

(1) 趁破は或いは趁跛で、房屋は下に續けるべきか。

② 《因果經》⁽¹⁾中、俱言修行有八般福田。救苦看病福田者、是第一救生。性強⁽²⁾、如南寺燒香、北院送供。救一人之命、如造七級寶塔。〔二三表〕

《因果經》⁽¹⁾中、俱ニ、修行ニ八般ノ福田アリトイウ。救苦ノ看病ノ福田ハ、第一ノ救生ナリ。性強ク、南寺デ香ヲ

焼イテ北院ニ供ヲ送ルガ如シ。一人ノ命ヲ救ウハ、七級ノ寶塔ヲ造ルガ如シ。

(1) 劉宋・求那跋陀羅譯《過去現在因果經》〔正三〕には「於諸福田中、佛福田爲最、若欲求大果、當供佛福田」〔卷四、一八九中〕などの表現があるが、本文に該當するものはない。また《佛說善惡因果經》〔正一一四〕にもない。八福田の説は《梵網經》に見えるのであり、唐・法藏撰《梵網經菩薩戒本疏》〔正六〇—一〕の《不瞻病苦戒第九》に、次のように説明される。

若佛子見一切疾病人、應供養如佛、無異。八福田中、看病福田第一福田。若父母師僧、弟子病諸根不具百種病苦、皆養令差、而菩薩以瞋根心、不至僧坊中。城邑曠野山林道路中、見病不救濟者、犯輕垢罪。〔以上經文。四三b c〕

八福田者、有人云、一造曠路美井、二水路橋梁、三平治峻路、四孝事父母、五供養沙門、六供養病人、七救濟危厄、八設無遮大會。未見出何聖教。有云、供養三寶爲三、四父母、五師僧、六貧窮、七病人、八畜生。亦未見教。……〔以上疏文。四三d〕

(2) この句、未詳。

◎宜清靜行之。行時、舌上收玉液丹⁽¹⁾。鼻中收元陽丹。腎堂中收金液丹⁽¹⁾。如精髓滿骨實者、死經百年、筋骨不解。名爲連子環鎖骨。〔一四表〕

宜シク清靜ニシテコレヲ行ウベシ。行時、舌上ニ玉液丹⁽¹⁾ヲ收メ、鼻中ニ元陽丹ヲ收メ、腎堂中ニ金液丹⁽¹⁾ヲ收ム。精髓ノ骨實ニ滿ツル如キモノハ、死シテ百年ヲ經ルモ、筋骨解ケズ。名ヅケテ連子環鎖骨トナス。

(1) 《靈寶華法》中卷《金液還丹第七》に次のような論述がある。

所謂玉液者、本自腎氣上升而到於心。以合心氣。二氣相交而過重樓。閉口不出而津滿玉池、咽之。而曰玉液還丹。……

所謂金液者、腎氣合心氣而不上升、薰蒸於肺。肺爲華蓋、下罩二氣、卽日而取肺液、在下田自尾閭穴上升……自上復下降、而入下田。乃曰金液還丹。

おわりに

本稿は、《金關玉鎖訣》のほぼ全體^(二三)を検討した。このように整理してみると、全般的にいえば、これは徹頭徹尾所謂内丹に關する諸問題を扱っていることがわかる。性をいい、命をいい、卽ち所謂性命雙修を標榜するものであるうが、當面は、いわば命に傾いた教理であり、性は、その前提條件として根底にあるか、それを包括し根據づけるものとして視野の彼方におかれているかのである。主として三章で考察したように、關心は、あくまで活動的な生命そのものの保持にあり、その欲求の強さには驚くべきものがある。資料の特徴はそれにつきるのであり、それはまた、所謂中國的といわれる事柄の一面であるかもしれない。

かくて、どのような理論にもとづいて、實際にどのような修行を行なっていたか、そしてそれは何を目標とするものであったか、修行者は、世俗世界とどのように繋がっていたか、など、全眞教理の一面が、若干明かになったと思われる。そこで、これらの事柄について、若干の評価を附言すれば、まず、性命の重視と、その性命を精血と氣の活動を中心とした身體のメカニズムとして捉えることは、宗教的にいえば、何ら超越の契機を含んでいない、といえる。

身體内部における諸もろの活動の如きは、日常的であり、世俗的であり、それらとの斷絶は何ら必要ない。従つて、孝行や忠君など、自覺的にも甚だ體制內的であり、現實の世界との矛盾はない。外部的なことは、内部的なことへの集中を妨げる限りにおいて意識されるが、しかし、その場合も、甚だしい緊張は認められず、兩者の關係は表面的であり、外面は内面の活動の契機とはならない。少くとも、ここには《重陽立教十五論》にみられるような、出家への嚴格な要請もなければ、兩者の關係への嚴しい自覺もない、といえよう。

ただし、天人相關を當然の前提とし、陰陽五行や八卦によつて、それを説明していくという態度に、内面を超える契機が認められないでもないが、それは、宗教的なものではなく、或いはかりに宗教的と認めても、それは道教に限定されたことではない。むしろ、それは、中國思想史・宗教史の一般的な現象であらう。とすれば、全眞教の所謂改革精神も、本質的には何ら新しいものを含んでいない、ともいえよう。

然らば、かかる教理は、王重陽の理論の中に、更に、全眞教全體の中に、どのような位置を占めるものであらうか。これについては、始めにのべた通り、資料としての疑問點もあり、確定的なことは何もいえないが、少くとも上述の《立教十五論》などとは若干相違し、また、活死人の墓を作つて自らの身體の束縛を超越せんとした王重陽自身の發想とも異なるようである。王重陽は始めは金丹道の口訣をうけたこと、また、現在、《五篇靈文》などが残っていることなどを勘案すれば、或いはこれは彼の初期のものであらうか。また、所謂南宗や、鍾離權・呂純陽などとの關連は、本稿の問題外としたところであり、すべて今後の課題である。

本稿は、教理内容の闡明を志向したが、語句の解釋を始めて、資料の讀解には不備な點が多い。それは、特殊用語の頻出にもよるが、資料自體の不完全さにもよつており、これらの點について、本稿は暫定的なものにすぎない。

また、資料の出典、傍證については、オリジナルなものにあたりきれていない不備もあり、また《仙學辭典》などを参照した點、安易な方法をとったところもあるが、これは、全面的に解釋不能とするよりも、一應の方向が措定する程度でも、その方がよいと考えたためである。無論、資料相互間の流傳や影響の關係は、今後とも検討していくべき問題である。

さて、視野をひろげてみると、精血を論じ性命を論じ、炁の活動を重視する、この半ば醫學的な教説は、無論、當時の思想や宗教と深く関わっているとしなければならない。王重陽の生きた時代の前後をみれば、宋學の形成とその展開があり、その大成者朱熹は、《周易參同契》などにも興味をもった人間である。太一教や眞大道教も勃興し、その教理のあるものは全眞教とも重なっている。また、金丹道も盛行し、用語を攝取したばかりでなく、思想内容的にも、それとも當然つながってこよう。王重陽の教説は、このような時代風潮の中で展開されたのであり、そうしてみると、この《金關玉鎖訣》の背後にも、北宋や南宋、金代の、思想・宗教界という廣漠たる世界が、限りもなく廣がっているのである。

注

- (1) 陳垣《南宋初河北新道教考》一九六二・七、北京・中華書局、二頁に「世以其非儒非釋、漫以道教目之、其實彼固名全眞也、若必以爲道教、亦道教中之改革派耳」とある。舊道教との關係については、窪德忠《中國の宗教改革 全眞教の成立》一九六七・一二、京都・法藏館、を参照。
- (2) 前掲窪著、五三頁参照。
- (3) 同、一三四頁。

- (4) 明・胡應麟《少室山房筆叢》卷四二、《玉壺遐覽》引《青巖叢錄》云「……王司寇跋王重陽碑云……重陽所爲說、未嘗引鍾呂……重陽得無師……」中國文化史叢書《中國道教史》、傳動家著、一九六六・三、臺灣商務印書館、二〇九—一〇頁。
 - (5) 前注参照。《鍾呂傳道集》は呂純陽が問い鍾離權が答える形式をとっている。藏一二四冊。
 - (6) 重刊道藏輯要、又胃集二。中華民國三年、成都二仙菴本による。
 - (7) 本稿二(4)参照。
 - (8) 注(5)参照。
 - (9) 藏七五く六冊、道藏精華錄第十種所收など。
 - (10) 藏七九六冊、卷下、六裏。
 - (11) 傳著、二〇七頁。
 - (12) 本稿に位置づけようがなかったものは、次の二句である。
我師言曰、皆見提井人不見用繩兒、無離後生有神水還丹田〔八表〕
訣曰二十四忌大丹者、是一年二十四炁上令〔一四表〕
後者は、或いは二(3)⑥に關わるものか。
- 〔附記〕本稿は、資料の指示と、若干の解釋について、本研究所窪徳忠教授に負っており、佛典引用について、同鎌田茂雄助教の援助をうけている。

(一九七一・九・五稿)